
レイステイルの遊び人

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイステイルの遊び人

【Nコード】

N1876W

【作者名】

つんどら

【あらすじ】

今日も今日とてギルドメンバーと馬鹿騒ぎ、していた筈が——ここはどこかな？

プレイしていたMMORPG・レイステイル、その千年後の世界に飛ばされた遊び人（ジョブ的な意味で）の女の子（プラス幼馴染）が死なない程度に頑張るのんびり冒険譚。わりと最強系、そして僕っ子です。

人物紹介・設定集

予備知識と言うか。随時追加します。

●レイステイル・オンライン

M M O R P G。V Rが流行する昨今では珍しく非体感型。操作は脳波感知のヘッドホン型コントローラー、文字入力のみキーボード使用。

キャラクターは3頭身で可愛いが、背景やモンスター、オブジェクト等はリアルを追求。勿論可愛い系のモンスターも存在するにはする。

コンセプトは「可愛さとリアルさを追求した理想郷RPG」。

●プレイヤー

リノ ♀ L V 1 0 0 0 ケット・シー 猫妖精族 フール 遊び人

中の人…佐原理乃(16)

レイステイルは初期(βサービス時)からプレイしている。インドア派。廃人。

僕っ子、やや性格に難あり。

ギルド【アルテマ】所属。

レオ？

中の人…？(16)

リノの幼馴染。

イロハ・ニホヘト ♂ L V 1 0 0 0 ドラゴノイド 竜人族 マジシャン 魔術師

ハイランダー 1人めの至高人にして最強の男。物理魔法混合の特攻型魔術師。

●その他（登場順）

レータ（10） ♂ コボルト
気弱だが勇敢な所もややある。懐っこい。
柴犬系の顔。

ハンシン ♂ 白虎

リノのペット、四神の1柱。

ヒバリ ♂ 朱雀

同じく。

ガメラ ♂ 玄武

同じく。

ギャラドス ♂ 青龍

同じく。

カンダタ ♂ ノトリリアス 大悪党

イリーガル 無法者出身、リノのペット。

元怪盗。

パンドラ ♀ アルケミスト 錬金術師

イリーガル 無法者出身、リノのペット。

元キメラ研究家。

イット ♂ デスビエロ 死神道化師

リノのペット。元モンスター。怖い。

ライドウ ♂ カオスサモナー 混沌召喚師

リノのペット。性格が悪い。

ウハル（19） ♂ コボルト

にこやかで底知れない。しかし友好的。
サモエドっぽい。

ヴィックル Lv682 ♂ 狼^{ワーウルフ}族 剣^{バスタード}騎士

師匠ことイロハ・ニホヘトのペット。義理堅く真面目だがたまに面倒くさがる。

レイクル ♀ 猫^{ワーキャット}族

イロハのペット。ヴィックルとの付き合いは長いらしい。

リーゼ・ディヴァイン 半^{アーク}神族 仙^{ハーフミット}人

ISMのまとめ役。文字通り天上人である。

ノッダル 牛^{ミノタウロス}頭族

牛頭一家、父。

アガ 牛^{ミノタウロス}頭族

牛頭一家、兄。

ホイシュ 牛^{ミノタウロス}頭族

牛頭一家、妹。ヴィックル愛。

ヤンバル（銀色）

クイナ（金色）

ランバード。リノのペット達。

ヴィヴィアン 泣^{パンシー}き女

リノのペット。

ゼディーギス・ガーズ・レーベルント 人^{ヒューマン}間族

伯爵家嫡男。放蕩息子。人をからかうのが好き。

はじまりの遊び人

科学技術の発展によりVRゲームが一般的となった現代。PCの操作も脳波を感知する事で簡単になり、さらには自らの体でプレイする感覚を楽しめるVRMMOが流行している。そんな中“色物ゲー”と揶揄されるMMORPG、レイステイル・オンラインをプレイし始めて6年が経つ。

レイステイルは、かつて流行っていたタイプのオンラインゲームをそのまま進化させたようなゲームである。操作はマウスとキーボードから脳波感知式に変化したのが、VRMMOのように自ら入り込むのではなく画面を見て操作する。グラフィックは3Dだが、リアルな等身大キャラクターではなく3頭身のデフォルメされたキャラクターが可愛い。しかしキャラクター以外は恐ろしくリアルで、アンデッド系モンスター等は頭身こそ3頭身だが、そのまま映画に出られそうだった。

そんなレイステイルをプレイしていたら、突然意識が途切れた。目が覚めてから十数分、この奇妙な状況が終わらないものか、と蒼髪に金色の目の少女はそっと目を閉じ、こめかみを指で押して眉を顰めた。

広がるのは荒野、ぽつぽつと延びた草は枯れたり枯れていなかったり、動物の姿は近くには無い。空には何匹か鳥も飛んでいるが、見たことの無い鳥だ。遠くには森らしき緑の線も見える。

とりあえず手慰みに、手にしたリユートを指で鳴らしてみる。ゲームのエフェクトそのままにカラフルな音符が散って、大体3メートルのあたりで消える。そこまでが効果範囲なのだろう。

彼女の名前は、リノ。つい先程まではPCの画面に向かい、ギルドメンバーたちと相も変わらず馬鹿騒ぎに興じていた、筈だ。

「VRにバージョンアップしたという可能性は……、無いよね」

レイステイルの開発者たちは、仮想現実よりも理想郷を目指した。愛らしいキャラクターがとてと歩き回る仕草がいいのであって、中に人が入るのは嫌だそうだ。リノもVRMMOをプレイした事はあるが、ロリータファッションの愛らしいプレイヤーが思いきりに股で歩いているのを目撃した事がある。確かにあれは気持ち悪かった。きっと開発者もその手のプレイヤーを見たのだろう、とりノは思う。

「……とりあえず、レオを探そうか」

ここが現実なのか、あるいはバーチャルなのかも分からない。けれど彼女はとりあえず、現実世界でも隣家に暮らし、ゲーム内でも殆どペアでいた幼馴染を探す事にした。軍服のような蒼い上着に紺のミニスカート姿で、べれんべれんと適当にリユートを鳴らしながら歩き出す。他の音があまり聞こえない荒野が、少し心細いからだ。独り言のネタも尽き、無言でリユートを掻き鳴らす。演奏スキルを体が覚えているのか、ほとんど無意識ながらメロディーを奏でている。その手の動きが段々激しくなり、やたらと激しい旋律を奏で始める。次第に、リユートからどす黒い波動と音符が放たれ始めた。

「ギユイツ！」

「んあ？」

奇妙な声が混ざり、振り向く。其処には茶色の草に倒れ、口から血を吐いた鼠の死体があった。気持ち悪くなったが、とりあえずしゃがんで覗き込む。

「……ああ、スキルが発動したんだ」

しばし悩んだ後、再び立ち上がる。ゲームプレイの時と同じように脳裏にスキルを思い浮かべると、思惑通りのスキルが発動する。《死者蘇生》^{リバイバル}の文字が脳裏に走り——掌から迸る光と共に、MPが消費される。その感覚は始めてのもので、少し目をぱちくりとさせた。

特殊技能^{エクストラ}のひとつである《死者蘇生》^{リバイバル}は、HPが0になった者を1分以内なら蘇生できる、というスキルである。似たようなスキルが神官の《再生》^{リライフ}だが、そっちの方は死ぬ前に掛けなければ効果が無い。

特殊技能^{エクストラ}はレベルカンストとクラスコンプリートその他諸々の条件を満たした者——至高人^{ハイランダー}にならなければ習得できない。全部で200種あり、攻撃・回復・防御を始めとして創造・製作など多岐に渡るバランス崩壊スキル、及びお遊びスキルだ。言わば茨の道乗り越えた者達へのご褒美で、開発曰く“愉快的スキル”が揃っている。

ただしもう1度やれと言われたら遠慮したいような鬼畜クエスト^{ハイランダー}を200もこなさなければならぬ。筋金入りの廃人揃いである至高人達も、口を揃えて「もうやらん」と言う程だ。

「すまないね」

何がなんだか分からぬ様子の鼠に一応謝り、リノは再びリユートを鳴らしながら歩き出す。殺害してしまった事に罪悪感はあるが、生き返らせたのでプラマイゼロに落ち着いたようだ。

彼女は尤も扱い辛いと言われるジョブ、遊び人^{フール}である。遊び人とは言うものの、楽しませる職業といったクラスが多い。

ジョブはいわゆる職業で変更は出来ないが、クラスはクエストなどで習得でき、それぞれ使用武器やスキルが異なるがいつでも切替できる。ひとつのジョブに5、6個のクラスがあり、戦闘などで熟練度を上げるとそのクラスのレベルが上がり、スキルやアビリティを習得できる。

つまり系統の同じ職業の中でクラスチェンジできる、という仕様である。

クラス習得クエストはレベルと共に解禁されていき、Lv900で一応全てのクラスが手に入るようになる。そして全クラスのレベルを200まで上げると、晴れてクラスコンプリートとなる。

それだけでも恐ろしく長い道のりだが、それでもクリアしたプレイヤーは20人弱存在する。至高人^{ハイランダー}の数よりは多い。数としてはやはり前衛職が多く、後衛職が少なめだ。

クラスごとに装備を用意しなければならなかったりもするため、金銭的にもあまり手が出ないという者が多い。コンプリートの先にある至高人^{ハイランダー}は確かに魅力的だが、まさにハイリスクハイリターン。そもそも辿りつくまでに大抵が挫折する。

暫くリユートでモンスターを寄せ付けない効果のある《不死人の鼻歌》を奏でつつ歩いていくと、何やら遠くに建造物らしきものが見えた。

「お、第一村人かな」

リユートを片手に持って軽く駆け出す。リノの種族は猫妖精^{ケット・シー}で、敏捷ステータスはかなり高い。風を切って駆け出すと、現実とのギャップに少し頭がくらりとするほどだ。

猫妖精は妖精種の中でもぶっちぎりで体力・筋力・耐久に欠けるが、他の要素はそこそ優れている。特に敏捷・器用・幸運は最高クラスのポテンシャルを誇っていた。

しかし魔術師^{マジシャン}ならエルフやハイエルフが人気、盗賊^{シーフ}や探求者^{シーカー}にするなら身体面も優れた獣人種が向き、神官にするには少し魔力・知力が心許なく、守護者と戦士^{ガーディアン}と格闘家^{ウォリアー}は以ての外。

ようするに器用貧乏で、遊び人^{フル}くらいにしか向いていない。その遊び人^{フル}が少ないので、必然的に猫妖精の数も少ないのだ。

接近してみると、どうやら建造物はテントだったらしい。円形のそれは、遊牧民族が使うものに似ている――が、あまりに人気^{ひとけ}が無い。テントは5つほど並んでいるが、全く人の声がしないのだ。

「襲撃でもされたかな……まあ、探してみよう」

物騒な事を言いつつ、テントの間を歩いてきよろきよると探し回る。

リノは種族と職の特徴として、幸運がかなり高い。幸運値の高さは隠しスキルの超直感^{シックスセンス}に反映され、ゲーム内では隠された物の発見を手助けしてくれた。具体的に言うところ、怪しい場所の上に見えにくい三角が出る。リノはこの三角の発見率が物凄く高かった。

ちなみにこれは誰でも稀に発生する現象だが、すぐ消えるので見間違いかと思う人が多い。

あたりを見回すと、盛られたような藁の上に半透明の見慣れた三角形が浮いていた。鋭角で下を指していたそれは、すぐに消えてなくなる。リノは上機嫌で、藁の塊を覗き込む。

「さわりたくない……」

納豆のような臭いがする。黒い靴下にハイカットのスニーカーを履いた足で、つんつんと藁を突付く。うーん、と少し悩んでからスキルを発動させた。

すると、藁の塊が浮かび上がって何かが地面にどすんと落ちる。

テレキネシス
《念動力》。これも特殊技能エクストラの1つだ。

本来、ゲーム内で物を動かすには、所有権が自分にあるか誰にも無い物ならアイテムボックスに入れて出すだけで良い。念動力テレキネシスは本来物を動かすのではなく、モンスターを戦いやすい配置にしたりする事に使う。勿論物にも作動するが。

藁は完全に脇に退けられて、残ったのは啞然としている子供がひとり。

「なっ、な、ひっ……」

「やあ」

ひいいと何故か脅えている少年は、体の骨格こそ人間に近いが、顔がまるつきり犬だ。

犬の特徴を持つ種族は3つあり、犬妖精クイ・シー（愛すべき不人気種）と獣人の狼人族ワーウルフ（ちなみに獣人は狼・猫・兎の3種）、そしてNPC限定種族のコボルトだ。

コボルトは敵モンスターでもあるが、このゲームでは普通にNPCにもゴブリンやコボルト等が居る。ゲーム本来のNPCの他、捕獲したモンスターをペットにして露店を任せる者が多い。

リノもレベル950の死神道化師デスビエロに露店を任せている。名前をイ

ットと言うのだが、プレイヤーの中では「トラウマが蘇る」とか「分かってても一瞬びくつとする」とか「お前はステイブン・○ングか」等と大人気である。

「コボルトか。パパとママはどこにいるんだい？」

「お、おとおお父さ、お、おとうさああああん」

「な、何で泣くんだ！　もう、だから子供ってのはやなんだ」

リノは子供が苦手だ。思考がよく分からないし身勝手によく泣く。前者2つについては思い切りリノにも当てはまるので、間違いない。同族嫌悪だろう。暫くリノはぐすぐすと泣く子供サイズの二足歩行コボル犬を眺めて悩んでいたものの、手に持ったリユートを構えて弾き始めた。

クールダウン

沈静化（精神系状態異常の回復）の効果のある、《水精霊のブルース》。何故か頭に流れ込む詩を口ずさむと、子供はみるみるうちに泣き止んで目をぱちくりとさせる。

ワンフリーズを歌い終え、はあ、と嘆息した。

「落ち着いたかい」

「う、うん」

至高の音色と謳われる（という設定）のレア楽器、《アル・ウード》。名前の由来はリユートの祖先と言われる楽器だ。形は琵琶に似ており、丸みのある背面には美しい模様が描かれ、弦の下穴には凝った意匠の透かし模様。職人技を感じさせる逸品で、名前の由来はリユートの祖先にあたる楽器だ。

少年は落ち着くと共に見たことの無い美しい楽器に眼を見張り、次に上を見上げて目に入ったりリノの顔に口をぽかんと開けた。

「お名前は」

「……れ、レータ」

「レータ君か。とりあえず起立しよう」

「きりつ？」

「……立ってみて」

立ち上がったレータは、ふんふんと鼻を鳴らしながら立ち上がる。よく見ると、本物の犬より少し鼻が低いようだ。ちなみに毛色は柴犬のような茶色である。

リノの身長は160cmジャスト。元の体での身長ではあるが、目線が変わらないので多分同じなのだろう。そのリノの胸あたりまでしか身長が無いため、おおよそ140cm程度だろうか。

「10歳くらいか？」

「う、うん、10歳」

「そうか。で、10歳のレータ君を放って君のパパとママは何処に？」

割と酷い物言いだが、気を害すでもなくレータはしょぼくれた顔になる。リノはまた泣くのか？ と若干後退した。逃げる気満々である。

「ど、奴隷狩りなんだ。こんなところまで悪い人がきて、みんな、連れてかれちゃった。だ、だれか助けてくれるまで、ここにいらつて、お、おとうさんが」

「奴隷狩りい？」

あまり聞きなれない響きである。レイステイルの世界に奴隷制度は存在しない。捕獲出来るのは最初から敵であるモンスターと、元からペットとして用意された者たちのみだ。

——いや。遠い記憶を辿ると、そういうえば何かで聞いた事がある

気もする。確か、

「……あ、あれか」

レベル800あたりの頃に受けたクエストだ。コボルトの家族が奴隷商人に攫われ、それを助けに行くという内容だった。

レイステイルのプレイヤーは冒険者と呼ばれるが、NPCの冒険者も存在する。彼らは基本的には戦わず立っているだけだが、クエスト等の際に共闘する事もある。そんな冒険者NPCの中でも悪人設定の者達がいって、無法者イリーガルと呼ばれていた。彼らはせこせこ悪事を繰り返して、クエストにもよく敵役で登場する。敵モンスター扱いなので、戦闘中であれば捕獲してペットにも出来る。

ちなみにリノも無法者出身イリーガルのペットを持っている。名前はカンダタといい、自称大怪盗の紳士スタイルな美青年で、「ネーミングが酷い」としょっちゅう言われていた。ちなみに彼は盗賊シーフの最上位クラスである大悪党ノートリアスである。

「うーん、助けた方がいいかな。どっちに攫われたか分かる？」

「……た、多分、あっち」

「ふむ。あ、馬車か何かの走った跡があるね」

リノはくると体を横に向けて、すたすたと歩き出す。助けるかは後で決めるにしても、無法者イリーガルが向かったなら街か何かがあるという事だ。

その後ろを慌ててレータが着いてくる。

「お、おねえちゃん、危ないよ」

「僕は平気だ。助けてくるから、きみはテントの隅でガタガタ震えてるといいよ。じゃ」

「ええ!？」

「最悪、全部眠らせて救出するし。どうする？」

スキルが使えるのであれば、全く問題無い。レベルが高いので殆どスキルは必中だし、眠らせたり気絶させたりのス킬は豊富である。

レータは少し悩んだ後、リノの上着の裾を掴んで着いてくる。

「おや、来るのか」

「う、うん。し、心配だもん……」

「そうか。見上げた心意気だ」

「いや、おねえちゃんが……」

「……」

にっこりと笑顔が降って来る。レータは震え上がったが、ますますリノの上着を握り締めた。

はじまりの遊び人（後書き）

のんびりいきます。

人助けする遊び人

リノは息を切らすレータを励ましつつ、平然と歩いていった。続く跡を辿りながら、かれこれ数十分は歩き続けている。

「お、おねえちゃん、何で疲れないの……」

「強いから」

身も蓋も無い。レイステイルにスタミナのステータスは無かったが、やはり体力値のおかげだろうか。初期値も上昇値も雀の涙とはいえ、1000レベルまでいけばそれなりの数値になる。リアルでは運動が得意でないリノだが、今のところ疲労感を感じない。

「疲れるかい？」

「うん」

「……うーん」

リノは逡巡した後、あ、と思いついたように声を上げて脳内にウインドウを思い浮かべた。

すると視界に、ゲームそのままのステータスウィンドウが現れる。ゲームと同じように動かしてみると、問題なく操作できた。

「なんだ。簡単じゃないか」

「……何が？」

「何でもない」

まるでVRだな、トリノは小さく笑う。そしてアイテムボックスから目当てのものを探し出して選択した。

「ちょっと離れてて」

手の中に現れたそれは、《召喚鍵^{サモン・キー}》というアイテムである。通常の召喚技能はペットのLVやランクに応じてMP消費が必要だが、このアイテムがあればMP消費がなくなるといふ優れたものだ。ちなみに召喚はレベル20で手に入り、捕獲と同時にクエストで習得できた。

楽器を1度仕舞い、美しい細工の施された鍵を空中に突き出して、ゲーム内でキャラクターがしていたように捻る。すると足元に魔法陣が現れて、咆哮と共にペットが出現した。

「ひぎゃあああああ！」

背後のレータが絶叫した。リノは振り向いて、逃げ出そうとしたレータの襟元を掴む。

「こら、逃げるな、怖がらなくていい。僕のペットだ」

「ペットおおお!？」

「そうだよ。今はモンスターは捕まえないのか」

「つつ、捕まえる!？ 何で!？」

ふむ、トリノは口元に指を当てて考える。――どうやらゲームそのものの世界ではないらしい。ペットスキル（捕獲と召喚^{キャプチャー サモン}）を得る

クエストの最後には、捕獲試験がある。試験で得たペットはそのまま自分のものになるので、ペットを持っていないプレイヤーなど殆ど居ない。

レータの脇腹に手を差し入れて、ひょいと持ち上げて――従順にお座りしていた巨大な体躯を持つ四足の獣、白虎の背中に乗せた。

「あるじ、随分久しいなあ。忘れられたかと思ったぞ」

のんびりとしたバリトンで言われ、一瞬驚いたもののリノは笑顔で誤魔化す。

確かにゲーム内でも喋ってはいたが、こんな口調だっただろうか。

「おや、……まさか。そんなに薄情者に見える？」

白虎は朱雀・玄武・青龍と合わせて捕獲した、それぞれLv90のボスクラスのモンスターだ。1匹1匹が恐ろしく強いので、倒すだけなら兎も角捕獲は非常に難しい。しかしリノは4匹とも手に入れて、それぞれハンシン、ヒバリ、ガメラ、ギャラドスという。由来は様々だが、いずれにしろ酷い事は変わらない。

「千年も何をしておるのかと思ったが、死んでおらんでよかったわ」
「……千年？」

「うむ。どうした、寝こけておったか」
「そんなところだよ」

思わぬ事実若干驚きつつも、動揺は仕舞い込んでハンシンの背中に跨る。白い毛は触り心地が良かった。

今だ恐怖に固まっているレータを後ろから腕を回して支えようと、「ひぎゃあ!」と再び叫び声。こわくないこわくないと宥めるリノだが、レータが叫んだのは年上の美人に抱き締められた事による驚

愕と気恥ずかしさだ。

「その馬車の跡っぽいのを辿って走ってくれる？ 町が見えたら止まってね」

「あい分かった」

ハンシンは大地を蹴って駆け出し、歩くのとは比べ物にならない速さで荒野を抜けていく。尤も俊敏値はリノの方が上なので、本気で走れば簡単に追い抜けると思われるが。

レータは暫く怖がって叫んでいたものの、次第に叫び疲れたのかぐったりと力を抜いた。

リノはスピード感と風を楽しみつつ、レータが落ちないように細腕で固定している。揺れないように走っているのか、快適だった。

「やはり人に乗せて走るのは楽しいことよ！」

機嫌よく言い、「ガルルルルアアー！」と雄叫びを上げる。腕の中のレータが「ひいひい！」と再び絶叫した。リノはくつくつと笑いつつ、思考を巡らせた。

何の役目も与えられていないペットは、亜空間に収容されているという。リノも膨大な数のペットを所有しており、その多くが様々な役目を与えられて動いている。目指すはモンスターのコンプリートだったが、流石にそれはまだ成し遂げていなかった。

——千年という時間経過。執事や店員として働いていたペットたちは、一体どうなったのだろうか。千年後のレイステイルがどうなっているのか、まったく想像も付かなかった。

「町が見えたぞ！」

「あ、うん」

ゆったりと減速し、ぴたりと歩みを止める。リノはレータを抱き上げたまま地面に降りて、お疲れ、と声をあけてハンシンに戻るように言った。

レータは地面に降りると、へなへなとへたり込む。

「どう？」

「し、し、しぬ、しぬかと思った……」

「そのくらいで死なないよ。ほら、立たないと置いてくよ」
「うえええ」

子供にも容赦なく叱咤して立たせ、膝の笑っているレータを半ば引き摺るように連れて行く。街はやや暗い雰囲気、門番らしき者も見えない。

ここでも脅えるレータを、痺れを切らしたりノがおぶって進んでいく。記憶にある町々を思い浮かべたが、ここまで活気の無い街は流石にゲーム内にも無かった気がする。

「しかし人が少ないね。モンスターにでも襲われたのかね」

「……っひ、そ、それじゃあ」

「まだ分らないよ。慌てない慌てない」

葬式のような空気の中、何かに脅えるように街を小走りに駆けていくごく少数の人々。

子供の遊ぶ姿すら無く、以前あった突発的な小イベントを思い出す。無法者の集団イリーガルが街に現れ、人々は脅えて家から出ず、ゴーストタウンのような有様になっていた。勿論その後で嬉々として討伐しに行ったが。

おそらくそのパターンかな、と予想してアイテムボックスから楽器を取り出す。

「あれかね」

いかにも無法者イリーガルの集まりそうな酒場がある。そこに荒々しい雰囲気雰囲気の男が入っていくのを見て、リノはとりあえず近づいて覗き見た。レータはガタガタ震えて必死に首にしがみ付いている。

「――だな！ 全くザコばっかだよ」

「酒もってこい！ もっとだよ、もっと」

「おい、姉ちゃんいいケツしてんな、こっち来いよ」

いかにもな連中が赤い顔で酒盛りに興じ、給仕の女性に絡んだりしている。リノはこっそりと特殊技能エクストラスキルの《分析アナライズ》を発動させてステータスを見たが、全員無法者イリーガル、ジョブは盗賊シーフと戦士ウォリアーと探求者シーカーがそれぞれ数人ずつで、レベルは20から30程度。全員クラスすら無いようで、ゲーム中で言えば初心者レベル。

最初のクラスが手に入るのは全職共通でレベル5である。入手クエストも「クラス認定書を●●さんから受け取って来てくれ」程度のもので、それこそ猿でも出来るようなものだ。

（もしかしてクエスト自体が無くなってるのか？）

まあ、それは後で考える事だ。相手は弱いに越した事は無い。

とりあえずレータを降ろし、ちよつと待ってて、と声を掛けて店内に入っていく。小声ながら必死に「あぶないよおお」と言うレータはスルーした。

「あのっ、少し聞いてもよろしいですか」

控えめに言う、見た目だけはお弱そうな美少女。ミニスカートと靴下の間に見える白い太腿を見て、男達は下卑た笑いを見せた。

「なんだ、こんな上物が残ってやがったのか」

「おい、来いよ。可愛がってやる」

イラつときたが抑えて、脅えた表情を作る。とりあえず攫った人々の場所を聞かなければどうしようもない。

「いえ、あの……わたし、コボルトのお友達が行方不明になってしまつて。何か知りませんか？」

「コボルトお？ そんなもん、地下にいくらでも転がってるよ」

そう言ってげらげらと笑う。犯罪行為を隠す気もない物言いに、呆れつつも安心する。少なくとも、人質に取られる者がこの場に無いのは僥倖だ。

「それはよかった」

笑顔の質ががらりと変わる。怪訝そうにした男達を前に、リノは既にリュートの弦を指で弾いている。演奏スキルの中でも短い“和音”タイプのスキルで、男達はがくんと頭を落として眠りに落ちていく。《夢魔の和音》を幾度か繰り返すと、啞然とした給仕以外の全員が床に崩れ落ち、鼾が響いていた。

音に驚いてレータが顔を覗かせると、リノは振り向いて手招きする。

「縛り上げるから手伝ってね」

「……え、ええええっ!？」

そして困惑するレータと給仕に手伝わせ、アイテムボックスから大量のロープ（何かのモンスターが落とした、用途のないゴミアイ

テムである）を取り出し、男達を1人ずつ手足を縛って行った。

「ふざけんじゃねえぞクソアマあ！」

「はいはい僕はクソアマですアバズレビッチですー、地下室みつけ」

目を覚ました男達は、隠されている筈の扉をあっさり発見したりノに驚愕する。リノにとっては隠すのうちにも入らない程度の隠蔽だ。上に柵が置いてある程度、全くもって障害になり得ない。やはり筋力も適用されているらしく、平然と柵を持ち上げてどかし、扉を開いて下に降りる。ちなみにこの柵を動かすのに、大の男が2人必要だった。

「やあどうも、こんにちは」

石の地下室に、大量に押し込まれた人々が居た。コボルトだけでなく他の種族も沢山居る。どうやら町の人々も混ざっているらしいかった。

彼らは恐怖に脅えた顔をし、次いで怪訝そうにして、最後に降りてきたレータを見て数人が驚愕した。

「レータっ!!!？」

「おとおさああああああん!!！」

さっと避けたリノの横を駆け抜けるレータ。服から飛び出た尻尾が引き千切そうな程振られ、耳がへにやりと下がっている。コボルトの男性は信じられない、という顔でレータを受け止めて抱き締める。わんわんと泣きじゃくるレータに、コボルトの女性が飛びつく。

「レータっ……!!」

「おかあさあああああんっ」

感動の再会といった様子にリノは両手を広げて肩を竦め、「まったく困ったもんだぜ」とでも言いたげな顔をしている。そんな彼女に1人のコボルトの老人(?)がゆったり歩み寄った。

「お嬢さんは、上の連中のお仲間ではないようじゃが」

「そうだよ。ワルに見える?」

「いやいや。まるで天使に見えるのう」

思わぬカウンター攻撃に、つい真顔になった。ほっほっほと笑うコボルトの老人は、油断の無い表情で問う。

「して、奴らは?」

「一応縄で縛ってあるけど。とりあえず何人か人を寄越してほしいかな」

「うむ、勿論じゃ。……何処のどなたか知らぬが、どうもありがとう」

両手を合わせ、深く頭を下げる。リノは「な、成り行きだしお礼とかいらないし」と照れ笑いを浮かべた。

狼人間と遊び人

ひとまず無法者^{イリーガル}は再び眠らせ、男衆が留置所に運んで行った。リノは助けたもののどうしようか、と逃げるタイミングを窺っていた。どうやらコボルト達は旅をしながら商売をしている集団らしい。しかし今回はこの街に賊が蔓延っている事を風の噂で聞き、離れた場所でテントを張って立ち往生している所を襲われたようだ。

「しかしあれ、でっかいテントだね。建てるのにどれくらいかかるの？」

「皆でやればそんなに掛かりませんよ。5、6時間程ですかね」

長の息子だという青年、ウハルとのんびりとお茶をしながら待つ。かれこれ数十分も経っていたが、なんだかんだで会話を引き伸ばす手腕は確かに商人に向いた感じで、リノも若干感心していた。感心はするがそろそろ逃げたい。

「おや、どうやら街の方々に話が伝わったようですね」

「へえー。僕はそろそろお暇、「この後食事を用意しておりますの

では是非ともご一緒していただけますか？」……うん」

畳み掛けるように言い、にっこりと犬顔が笑う。どうやらコボルトにも人種のようなものがあるらしく、ウハルはなんとなくサモエドに似ていた。白い毛に笑い顔がまさにサモエドスマイル。本当に商人向きだな、とリノは力なく頭を垂れた。

数十分後、リノは半泣きで会場内を逃げ惑っていた。ここですよ、と連れてこられた宿の一階の食事所には、予想よりかなり多い人々が揃っていた。子供達には好奇心バリバリで追い回され、大人たちには涙ながらにお礼を言われ、子供が苦手で賞賛と感謝を向けられるのも苦手なりノは食事もそこそこに逃げ回っているのである。

「待てーっ！ー！」

「虎出せっ！ とらーっ！」

「出さないからっ！ 来るなーっ！ 寝かすぞ！」

最初は半信半疑だったらしいが、謎スキルの技術を使うリノを見ると疑いも無くなったようだ。リノは特殊技能エクストラまで使って逃げ周り、ついには街の方に飛び出——そうとして誰かにぶつかった。

「うわっふ！」

「ん？」

逞しい体躯の男である。見上げれば顔は銀色の狼頭で、しかし袖から出た手は人間なので狼人族ワウルフだろう。獰猛な顔は怪訝そうにリノを見下ろしている。

しかしリノにはどうでもいい事だった。「もうっ！」と叫ぶなり何故か狼男の両足の間をすり抜けて外に駆け出し、それを子供達が

追い、後ろであまりのダイナミックな逃走法に人々が大笑いし始めた。

両足を門扱いされた男は怪訝そうな顔で後ろを振り向きつつ、入り口付近に居た知人に問う。

「何だ今の？」

「やー、ヴィックル。遅かったな、あの嬢ちゃんが皆捕まえちまったよ」

「……はあ？」

ヴィックルは昔この街で暮らしていた者で、今は王都で騎士をしている。風の噂でこの街の危機を知り、休暇をもぎ取って駆けつけてきた。しかし戻って来たものの街は平常どおりで、人々は何故か宿に集まって宴会中だという。

そして宿に来たら今の展開だ。

全く訳が分からない。

「……どなたか引き取ってくれるかな、ガキどもを」

なんとなく宴会に加わってヴィックルが酒を飲みつつ話を聞いていると、入り口に子供を引っ付けたリノが戻ってきた。3人の子供は揃って熟睡しており、1人は首に巻きついて眠り、残りは小脇に抱えられている。

何とも微笑まじげな視線が集中して「あああかゆい！ かゆいからその目！」と再び悶絶し始める。ヴィックルは別の点を抜け目なく観察していた。――あれだけ走り、子供を抱えて戻ってきてても全く息切れや疲労が見えない。

「おや、さっきの狼人族^{ワウルフ}。ぶつかって申し訳ないね」

「いや、構わん。それより少し話を聞かせてほしいんだが」

「いいよ。冒険者の人なら、僕も得るものがありそうだし」

カーンとバトル開始のゴングが鳴ったような気がする。にんまりとリノは微笑み、情報を搾り取るだけ搾り取ろう、そして逃げようと覚悟を決める。ヴィックルもまた、リノを見極めようとに癡猛な笑みを浮かべた。

「賊どもを眠らせたと聞いたんだが、《睡眠魔》^{スリープ}の魔法か？」

「いや、僕のはちょっと特殊だね。このあたりじゃ無いのかな、楽器の技は」

「噂で聞いた事はあるがな。見せてもらえるか」

「構わないよ。じゃあ、一曲」

アイテムボックスからリユートを取り出す。それだけで回りが驚くが、特に意に介さずに足を組み、ついでに演奏補助スキルを発動する。これは音を重ねて効果を上げるという物で、テーブルの上にアコーディオンとフルートを持った掌大の小人^{ボックス}が現れ、更にざわめきが増した。

曲目は、《琵琶法師の応援歌》である。名前からしてふざけているものの、その効果は絶大だ。

全て演奏すると5分もかかるそのスキルの効果は、HPMP持続回復（5秒ごとに10%）とステータス全上昇、取得経験値10%UPにアイテムドロップ率50%UP、極めつけに敵へのステータス低下とランダム状態異常付与。

補助スキルの最高峰とも言えるその曲は、冠する名の通りなんとなく古臭い。しかし不思議と心の躍るような感覚に、ヴィックルは目を細めて聞き入る。

ざわめきは消え、ただ皆が息を呑む。なんとなく活力が溢れ、何でもできるような気分になっていくうちに曲が最後の1音を奏で、

リノの「おしまーい。じゃ、そういう事で」という言葉に我に返る。そのまま逃走を開始しようとしたのでヴィックルは腕を掴んで引きとめた。

「何だい？」

「話を聞かせてくれると言っただろう」

「この様子で？」

にやりと笑うと共に、周りから万雷の拍手が降り注いだ。これが狙いか、とヴィックルも口元を歪める。

「なら明日聞かせろ」

「ふーん」

にやりと笑うリノだが、いつまでも腕を掴んで笑い合う（ただし笑いの種類がダークサイド）2人を見て、いい雰囲気だと散々からかわれて、キレて全員眠らせたのは余談である。



そのまま宿にタダで泊めてもらった後、食堂の端にバリケードを作成してヴィックルを待ち構えた。その顔は何故か疲弊している。

昨日は吟遊詩人 minstrelのクラスだったのだが、昨夜の内にクラスチェンジをした。結果、ゲーム内と同じエフェクトが出て「人前でやなくて良かった……」と心底思った。

至高人限定のエフェクトは大量にあるが、クラスチェンジ時のも

のはこういったものである。

体が発光し、足元に魔法陣が現れてぐるぐると回転し、軽く体が浮遊する。更に光球のついた神々しい輪が体の周りを回転する。置物のモビールみたいな回り方で。

更にトランプが魔法陣の四方のスートから飛び出してそれぞれリノの胸に吸い込まれていき、最後のジョーカーが一際輝いて胸に吸い込まれると共に体が派手に発光する。

そしてふわりと地面に降り立ったりリノは、最上位クラスの遊戯人ジョーカー用に設定しておいた装備に切り替わり、手に大鎌（※ネタ武器）を持って見事にorzの体制を取った。

その後床に拳を叩き付けながら叫んだ言葉を、もう一度繰り返して言う。

「……魔法少女かつ！」

「は？」

四方を巨大トランプの壁で覆った部屋の一面を開き、ヴィックルが現れる。リノはぶつぶつと呟きながら朝食のパンを噛み千切った。午前10時。色々と涙目だったリノは思い切り眠りこけて、こんな時間にやっと朝食を取っている。……本当は8時に起きたのだが子供の襲撃を受けて2時間もロスした。

どうやらレータに話を聞いたらしく、やたらハンシンを見たがるのである。これは後で締めなければな、とリノは心に決めた。

「で、何だい？ 話？」

「ああ。――昨日の演奏だ。あれは原初魔法か？」

「オリジン？ ごめん、僕かなり世間知らずなんだ。多分千年前で頭が止まってるから、専門用語は説明を添えて使って」

ひらりと手を振って照れ隠しにオムレッツにスプーンを突き刺す。
ヴィックルは向かい側の椅子に座ると、既に用意されていた紅茶に
口を付けた。

「……千年前？」

「何だか分からないけど、超長い昼寝でもしていたみたいで」

突拍子もない話に、ヴィックルは眉を顰める。リノは既に彼のステータスを分析アナライズで見えており、こいつならバラしていいや、と思っていた。

「つてか、君も千年前の人じゃないか」

「……。何でだ？」

「分析アナライズ。しっかしまあ、ペットが一人歩きか」

時代の流れてすごいね、と笑う。ヴィックルのステータスには、
狼人族ワウルフの剣騎士バスタード、レベル682——そして一般市民でも冒険者でも
無法者イリーガルでもなく、ペットと書かれていた。
狼男ウルフマンではなく狼人間ワウルフと書かれているため、元無法者イリーガルだろうと予想
が付いたが、そこは突っ込まずにおく。

「何のことだ」

「しらばつくないでよ。しかも師匠のペットだし」

「師匠？」

「イロハ・ニホヘト師匠」

——至高人ハイランダーの1人、イロハ・ニホヘト。魔術師マジシャンのソロプレイヤー
で、彼こそが1人目に至高人ハイランダーになった男である。
装備をぎっちり体力・耐久で固めた竜人族ドラゴノイドにして、前衛特攻型

マジシャン
魔術師の彼は敬意と畏怖を込めて「師匠」と呼ばれていた。

ヴィックルはその名前を聞くと、驚愕したように目を見開く。毛を逆立てて牙を剥き、怒鳴るように言った。

「イロハ様を知っているのかっ!!」

「既知だけど。居場所は知らないよ」

食い下がるヴィックルを宥め、ひとまず千年前や今までに起こった事を説明させた。

かつての時代は、今では古レイステイル文明と呼ばれているらしい。当時のアイテムの多くは古代遺物アーティファクトとして高値で取引され、また研究の対象にもなっている。

当時の冒険者達ブレイヤーは千年前に姿を消し、ペット達には契約と忠誠が残った。無論そのうち老衰で死ぬペットも出たが、今までどおり亜空間に戻るだけだったらしい。

ヴィックルは千年前イロハと一緒に居たのだが、唐突に主の姿が掻き消えて跡形も無くなり、そのままイロハの拠点ホームで数百年暮らしたそうだった。

その拠点ホームがこの街付近にある、と聞いてリノが目を見開いた。

「……って事はここ、アーティアレスト!? あれ、王都は?」

「冒険者が消えた後、モンスターを押さえきれなくなって王都は移転した。イロハ様の拠点は守ったが、当時の王都は1度更地になった」

「いや、国も守ってよ!」

「反省はしている。レイクルに叱られて、仕方なく騎士団に入ったんだが」

「レイクルって?」

「無法者時代に仲間だった猫人族だ」
イリーガル
フリーキャット

アーティアレスト王国はスタート地点の神殿もある大国、だった。どうやら今は三つに分裂し、神殿のある東側がアーティアレスト王国、内陸の南側がアーティアレスト共和国、北側にティア・ニール帝国、となっているらしい。外側の国を取り込んでいるので結構大きい国になっているそうだ。

「あと、クラスとかどうなってるの？」

「習得は実質出来なくなった。偶然に条件をクリアして習得する者も稀に居るようだが、気づかないらしい。……あとは、クラスを持つて生まれてくる子供が500年くらい前から生まれ始めたな」

「それはまた、……何か、びっくりなんだけど」

「ああ。正直、聞いた瞬間から数時間は口が閉まらなくなった」

「……え、まさか先天的大魔術士とか居ちゃうの？」
ウィザード

ヴィックルが無言で顔を横に逸らす。リノはごくりと唾を飲み込み、思い切りフォークをトマトに突き刺した。——そして重々しい声が述べる。

「いる」

「ころす」

「……イロハ様のクエストは見たし、俺も理不尽すぎるとは思ったんだが」

リノは遊戯人習得クエストを思い出すと、頭痛がする。
ジョーカー

まず一段階目からしてぶっ飛んでいる。内容ではなく、数が。

殺人鬼をソロで10000匹狩れ。100か1000の間違いで
マード
はないかと画面を睨んだリノは正常だ。しかも殺人鬼は格下ながら攻撃力が高く、紙防御のリノにはキツイものがある。一撃で5〜1

0%もHPが削れるのだ。

それでもなんとか吟遊詩人^{ミンストレル}や聖職者^{クレリック}にパーティを組まなくていいタイプの支援スキルを掛けてもらい、ひたすら頑張った。一応これはまだ、時間さえ掛ければクリアできるので良心的な方だ。しかし今でも殺人鬼^{マード}の笑い声がトラウマ気味である。

勿論それだけでは終わらない。

次は道化王^{クラウンキング}をソロで100回討伐。道化王はダンジョンボスで、レベルは850。正直ギリギリだ。しかも1回ごとにダンジョンに潜らなければならぬし、入場制限のせいで最初から最後までソロでなければいけない。本気でクラス伝授者を殺したくなった。

その後はレアアイテムを100個やらNPC50人に話をしてこいやら無法者^{イリーガル}を50人討伐しろやらと地味に胃と頭と精神に来るクエストを繰り返す。

ようやく手に入れた最上位クラスなのである。

他のジョブも似たりよったりで、格闘王^{グラップラー}なら“PVP（対人戦）で100戦勝ち抜け”やら守護神^{バリアント}の“戦闘中に30回以上HPを5%まで減らして生還しろ”やら探検王^{スぺランカー}の“各地に100箇所隠した地点を探せ”、とそんな感じである。

「腹立つー。あ、という事は僕のホーム残ってるのかな？」

「至高人^{ハイランダー}級の拠点になるとほとんど古代遺産扱いだな」

「それは製作者冥利に尽きるね。ダンジョンは？　うちのギルドわんさか作ってたけど」

「……各地に残っているが……ん？　お前、まさか」

「あ、そういや自己紹介がまだだったね。【アルテマ】の8番め、リノだよ」

ぐあ、と大きな口が開き、ヴィックルは唾然とした。

ゲーム内でも変装してバラしたりするとこの反応だったな、とり

ノは若干懐かしく思った。

狼人間と遊び人 つづき

【アルテマ】は生きた伝説扱いのギルドだった。
No1の忍からNo8のリノまで、全員が至高人^{ハイランダー}。しかも全員違うジョブで揃えている。人呼んで“至高のギルド”……ようするに廃人だらけなのだが、物は言い様だ。

初心者向けから玄人向けまで数多くのダンジョンを（夜中のテンションで）作成し、有力ギルドに攻め込んでは何も獲らずに帰ったり、かと思えば1人ずつイロハ・ニホヘトに闇討ちされて復讐を誓っていたり、何故か王都でライブをしたり、高価な装備やアイテムを1テール（貨幣の単位）で大量に流して相場をガタ落ちさせ、以下略。

良い意味でも悪い意味でも有名なギルドである。

「……リノって……あのリノか……？」

「どのリノか知らないけど。僕しかいないだろうね、リノは」

同じ名前は登録できないので、リノのようなありがちな名前は大抵が古参である。

「モンスター襲撃のイベントで、毎回何もせずに踊ってたりする……」

「そのリノだよ」

リノは自分がやらなくていい時は大抵踊るか遊んでいた。踊りは一応効果のある吟遊詩人 ^{minstrel} のスキルだが、楽器の方が遥かに効率的である。ちなみに種類はベリールダンスに剣舞、社交ダンス（男女の2種類があり、ペアでする）など。

トリップする前も街中にギルドで集まり、知り合いの遊び人 ^{フール} をありったけ集めて演奏やダンス、更にその周りでひたすらギルメンが花火やらを打ち上げたりと騒いでいた。名目上はギルドメンバーの誕生会である。

「で、クラス持ちとかの事を説明よろしくね」

「ああ。……クラス持ちは結構数が多い。やはり下位のクラスが多く、最上位なんかは片手の指で足りる程度だ」

「へー……」

「ある程度、遺産もするらしい」

滅茶苦茶な話だ、とヴィックルは力なく笑った。彼自身、ゲーム内で描かれてはいないとはいえクラスを得るために必死に努力したのだから。

「そういえば、ステータスとか分かる？」

「ステータスは……まあ、俺たち ^{ペット} には見えている。他は見えないらしい」

「アイテムボックスは使える？」

「アイテムボックス……ああ、あれは無理だ」

「ふーん。スキルってどうなってるの？」

「クラス持ちはある程度使える。だが、合わない武器を使っている習得できない事が多いな」

本来自分の装備可能な武器というのは決まっていて、それ以外装

備は出来ない。装備している武器のスキルが習得／強化されというシステムなので、その所為でスキルが覚えられないのだろう。

「指摘しないの？」

「したが……素手で攻撃とか馬鹿か、とか。針なんて何に使えるんだ、とか……言われてな」

素手やナックルは格闘家ファイターの武器、針は盗賊シーフの武器のひとつである。

「遊び人フリーは？」

「発見しにくい。トランプで机切り倒してる奴がカジノに居たから、多分あれだと思うが」

シュールな光景だが、トランプは遊び人フリーの代表的な武器で、道化クラウシ、奇術師トリックスター、賭博師ギャンブラー等のクラスで利用できる。

「って言うか、クラスってどうやって見分けるの？ ステータスが見えないんでしょ」

「……今では古代遺物扱いだが、プロフィールリングアーティファクトというものがあっただろう？」

「……え、あれ？」

レイステイルでは、基本的には他人のステータスが見られない。デフォルトで情報開示がオフになっているのだ。勿論開示をオンにしておけば見られる。分析は特別だ。

部分的に見せたい場合はプロフィールリングというものを使う。レベル、ジョブ、クラスのみが頭上に表示されるようになるアイテムだ。ちなみに普段は名前・ギルド名のみが表示されている。

「何か色々と微妙な……ジョブとかレベルも？」

「ああ。子供が生まれると、必ず調べる事になっている」

「うわー。今いくらくらいする？」

「昔で言うところ1億テールくらいはする。大きな都市のギルドや神殿になら置いてある」

「……僕、造れるんだけど。生産スキルも無いのか」

レイステイルの生産スキルは1人で全種類習得できる。プロフィールリングは細工のLV1で、生産スキルを習得すればすぐに作成する事が出来る。

生産の種類は加工・細工・裁縫・大工・錬金・武器・防具・料理の8つあり、それぞれレベルは10までである。

「生産スキルは一応残ってはいるが、レシピが見られんからな」

「なるほど。……でも、あれって確かテール消費じゃん」

「その発想がまず無いんだ」

テール消費、とは加工や細工などの低レベル生産品によくある、材料無しで金だけ消費して作れるアイテムの事だ。

基本的に、あまり効果の無いものばかりである。

「えー……」

「そもそも金貨を曲げたり溶かしたりするのは違法だし、高価すぎる」

「あ、そうなの。お金ってどうなってるの？」

「あの頃は金貨1枚で1テールだが、今は100万テールの価値がある。銀貨、晶貨、銅貨、小銅貨が増えたな。それぞれ10万、1万、千、百の価値だ」

リノは思わず食後の紅茶を噴出しそうになった。

拠点にある分を含めると、リノの総資産は八十億テール弱。それ

が更に100万倍という事になると、——リノはこめかみを押さえ、頭痛を堪えた。

「僕、手元に4G^{ギガ}……40億、拠点にも同じ位残ってるんだけど。ああ、計算が！」

「ちなみにテールという単位は残っているが、あまり使われない」

「うー……銅貨が1k、晶貨が10k、銀貨が100kか……金貨は1M^{メガ}ね。よし、覚えた」

「懐かしいな。イロハ様もよく使っていた数え方だ」

「覚えなきゃ生きていけないし……」

kやM、Gはオンラインゲームでよく使われる単位で、1k^千1M^{百万}10億である。流石にあまり使わないが、T^{テラ}1兆なんてものもある。

「あ、そういえば商店とか商会は残ってる？」

「任せられてたペット達が続けていたが、幾つかは潰れたな。サンカワ商会とホルム薬品店、トイストア・リトルクラウンは……お前の店か。残ってるぞ」

「残ってるんだ！ うわー、千年もよくやるね」

ゲーム内では露店を開けるが、土地を購入して店を作ったり、その分店を作ったり、または別々の店同士を商会として纏めたり出来た。リノは遊び人^{フリー}向け装備やネタアイテムのみを売る店、トイストア・リトルクラウンを経営している。正直最近は忘れ去っていたが。ちなみにそれ以外の品は露店などで販売している。

「そういえば、老衰で死んでも待機場所に戻ったんだよね？」

「ああ」

「待機場所ってどうなってるの？ 亜空間って聞いたけど」

「拠点ホームのドアと繋がっていて、中は普通に自然が広がっている。他の主を持つペットも同じ空間に居るが、出られるのは自分の主の拠点ホームとギルドの拠点からだけだ」

「ふーん……あれ、召喚しなくても出られるの？」

「《召喚鍵サモン・キー》でドアを開ければいつでも出られるようになった」

再びリノが紅茶を嘔きそうになった。

そもそも《召喚鍵サモン・キー》は入手方法がボスモンスターからのドロップしかない。取引不可アイテムなので、人に譲り渡す事も出来ない。……つまり彼らが自力で取ってきたという事になる。

「……《混沌召喚師カオスサモナー》なんてよく倒したね」

「うちの連中は精鋭揃いだからな」

《混沌召喚師カオスサモナー》は、召喚スキルで大量にモンスターを呼び寄せてくるえげつないボスモンスターである。本体もレベルは900と中々高レベルだ。

「多分、お前の所の奴らもやってるんじゃないか」

「うちの子たちは、まあ、ね。って言うか《混沌召喚師カオスサモナー》も居るし」

「……!？」

「敵性召喚すれば自給自足で稼げるね」

敵性召喚エネミーサモンとはペットを敵モンスターとして召喚するスキルである。こちらは召喚スキルサモンよりもずっと後、レベル500で手に入る。また、固体名の付いたペットではなく、普通のモンスターとして召喚される。しかし危険なので街中やフィールドでも使用は推奨されない。と言うか自分で処理できないと白い目で見られる。

経験値稼ぎにはなるが、同種は1匹ずつしか召喚できないので効率は悪い。普通に狩った方が良い。

ちなみに混沌召喚師カオスサモナーが使うのは普通の召喚だ。サモン

「確かライドウ君（※混沌召喚師）は拠点ホームで番人してたかな？ ペ
ット仲間にボコられてるんじゃない？」

「仲間割れ!？」

「性格悪いしね」

モンスターとはいえ、台詞は豊富に用意されている。混沌召喚師カオスサモナーは「滅べ」が口癖の毒舌悪魔だ。ペットになってからの台詞は「ふん、その程度で我が主君に逆おうとは愚かな。滅べ」やら「我が主の館へようこそ。不本意ながら滅ぶべき貴様のような豚にももてなしをくれてやる」やらとものすごく傲岸不遜だ。

ちなみにレイステイルの会話はフルボイスだ。合成音声システムで入力した文字を読み上げてくれるのである。会話ウィンドウにも表示されるが。

「……うーん。とりあえず、拠点ホーム見てきたいな」

リノの拠点はお遊び要素をたっぷり入れた森の中の洋館だ。ホーム

数々のギミックが施され、敵モンスターこそ配置していないがそこかしこにワープパネルやら悪戯系スキルのパネルがある。そしてリノの私室にたどり着けばちよとしたご褒美が用意されていた。

管理人はカンダタ、使用人頭は同じく無法者出身のパンドラ、更に大量の使用人を配置してある。彼らにはヒントを言うように設定してあった。

「リノの拠点は何処だ？」ホーム

「レイレストの郊外の森。でかい洋館だけど」

「……………ああっ!？」

ヴィックルが驚愕の表情を浮かべる。驚いたリノは思わずデザートを取り落とし、恨みがましくヴィックルを睨んだ。

「お前の屋敷かあれはっ！」

「ん？」

「昔、情報収集のために冒険者の拠点^{ホーム}を訪ねていたんだが――」

曰く、庭で遭難し、辿り付いた屋敷では慇懃無礼すぎる出迎えに散々嫌味を言われ、陰湿なトラップに足を取られて転び、転んだ先に更にトラップがあって顔にマークが付き、更にそれを数十回繰り返し、ワープパネルの所為で迷いまくり、結局最後は外にワープして諦めた。

リノは聞けば聞くほどいい笑顔になっている。

「いやあ、ありがとう。ああほんと、最高」

「お前は最低だっ！」

ヴィックルに罵られつつ、リノは“迷いの館”と呼ばれているらしい我が家に行く事に決めた。

歩き出す遊び人

その後もぎやあぎやあ喚くヴィツクルを宥めて色々話を聞いたところ、オリジン原初魔法とは現代の人間が再現出来なくなっているスキルの事を言うらしい。オリジン原初魔法は数百年の内に確認された物を指すが、古書物等の記録にしかないものは遺失魔法ロストと言われる。

また、クラス持ちは“ギフト”と呼ばれ、判明すると国立の寄宿学校に無料で通えるらしい。期間は基本8年間の飛び級有り、卒業後は軍、騎士団、神殿、魔術研究施設などに進んだり、あるいは冒険者になったりする。

しかしクラスやジョブについての知識は殆ど忘れ去られ、そのせいで武器が特殊なクラスは殆どスキルが育たず、数少ない遊び人系フルは何もできず肩身が狭いらしい。

「腹立つから、そのうち行って僕がスキルを伝授してやろうと思う」

「悪戯スキルばかり教えるなよ」

「やだなあそんな事……ところで進歩しない文明だね。魔法発展の弊害か」

「話を逸らしたな」

レイステイルでは、魔法は誰でも使える魔力活用法、魔術は魔術^{マジック}師だけが研究してきた高度な魔法、とされていた。ちなみに神官^{プリースト}のものは神聖術という。

MPをあまり消費しない生活系の魔法は共通技能に含まれ、暖炉の火種にできる《フラワー》、コップに水を満たす《ブローク》、暑い日に便利な《ファン》、小さな植木鉢に土を満たす《ポッド》、懐中電灯代わりの《ライト》等がある。

そして千年後の今は魔法も改良が重ねられ、攻撃力を増したものが使われるようになったらしい。スキルが使えないため、持て余したMPを魔法に回すようになったようだ。

話を終えると丁度昼時になっていたので、荷物を取りに戻って帰ってきたウハルを交えて食事を取る。朝食を終えて二時間半しか経っていないので、軽めのものを頼んだ。

「リノさんはこれからどうなさるんです？」

「どうって？」

「此処に滞在するか、それとも王都の方へ向かうんですか？」

「あー。王都の先に行きたい場所があるんだけど、王都にも寄るよ」

レイレストは現王都の北西にあり、その更に先のティア・ニール帝国との国境を跨ぐ巨大な森にリノの拠点^{ホーム}はある。現在の様子は知らないが、とりあえず森は残っているらしい。

「1人で行けるか？」

「昔のアティナあたりでしょ？ 行けるだろうけど。でも一人旅はきついかな」

「じゃあ、俺も明日帰るから一緒に行くか」

「ああ、王都から来たんだっけ。ならよろしく頼むよ」

若干堅いパンを引き千切りながら言う。

男との2人旅に全く抵抗が無い点に少し心配になりつつ、ウハルは旅の間の食糧を如何に売りつけようかと考えを巡らせるのであった。



翌朝、リノは一応長旅に耐えそうな手足の隠れる装備を着て下に降りました。

いかにもゲーム味の強い白いジャケットには青いラインが入っていて、なんとなく清純そうな雰囲気がある。下は膝丈のハーフパンツに黒タイツだった。

……装備に長ズボンが1つも無い事には、リノも初めて気づいた。

「おはよ」

「おう」

ヴィックルは荷物を横に置いて既に朝食を取っている。夜までに荒野を抜けた先の村に着きたいから、と決めたのですぐに出立する予定だ。

暫く歩くためがつつりと朝食を食べているヴィックルの前に座り、既に用意されていた朝食を食べ始める。

「それにしても僕、慣れが早いよね」

「……？　そうか」

「適応能力ありすぎ。あ、聞き流していいよ、僕独り言多いから」

しかし堅いパンだな、とぶつぶつ言いつつ食事を進める。どうやらあまり発展していない時代のようで、内装も外装も古めかしい。しかしその割にあまり不潔さは無く、今一よく分からない。ゲーム内とそう変わらない感じはするが。

「じゃあ、行こうか」

「おう」

食べ終えて、ヴィックルが食事代を払う。リノは金貨しか持っていないので、ついでにヴィックルに余分に払ってもらった。タダで良いとは言われたものの、少し心苦しい。

時間は朝6時。季節は春、少し肌寒い空気だが顔以外は装備のお陰か適温だ。

「げっ」

入り口とは反対側、街の出口に子供が数人立っていた。心底わくわくした顔である。

というのも昨日、虎を見せろ見せろとうるさいので「なら僕が出るより早く起きて見送りに来れたら見せてやる」と売り言葉に買い言葉でつい言ってしまったのだ。

リノは溜息を吐き、アイテムボックスから鍵を取り出した。

「来たね、ガキども」

「来てやったぞ！」

「みせろーっ！！」

「見せるまで通さん！」

眠気を感じさせないハイテンションさに、読みが甘かった、と諦める。

子供は苦手だ。それはもうかなり苦手だが、嫌いという程でもない。リノはハンシンを召喚して見せてやり、恐れるでもなくはしゃぐ子供を見て少し笑った。

レベル差が激しいのでうっかり殺害してしまう可能性があり、若干ひやひやしたが。

「ではいずれまた会いましょう」

「ば、ばいばい」

いつの間にかやって来たウハルが相変わらずの笑顔で言い、レータがおどおどしながら手を振っている。その後ろからも聞きつけたらしい人々が出てきて、当初の予定が丸ごと崩れた。正直な所リノもヴィックルも、見送りとか恥ずかしいからいらん、が共通意見だ。

結局レータに飛びつかれウハルには生温かい目で見られた。その後ちやっかり「是非とも次回もご贔屓に。本家の店が王都にありますのでね、あ、レンダー雑貨店といましてそこそこ大きいんですよ。父の兄が経営しておりますね、ええ、どうぞよろしく願います」とビジネススマイルで言われて逃げるように飛び出したのは余談である。

あのままだと言葉に流されて投資とかする羽目になったと思う、とリノは後に語った。



旅とは言っても、特筆すべき事は無く歩いているだけだ。街から見て西側には森、南北と東には荒野が広がっている。

早々に荷物も全てアイテムボックスに入れて、お互い手ぶらですたすたと歩いている。歩幅は違うが速度にはあまり差が無い。

「まあ、暫くは森に沿ってひたすら歩くだけだ。疲れたら言え」

「うん。モンスター避けとかした方がいい？」

「いらん。このあたりは精々、レベルで言えば50くらいまでの奴しか居ないからな。MPの無駄だ」

「ま、そっか」

ちなみに今の時代、一般市民はゲーム上の非戦闘NPCと同じくらいで1から20レベル程度の力量らしい。戦う職業の者は長年戦い抜いてやっと100レベルに到達し、一部の素質ある者やクラス持ちなどはやっと200に届く。

ペット達は遥かに上だが、基本的には時代に合わせて力を抑えて戦っていたらしい。

「……モンスターってどうやって対処してるの？」

「基本的には集団で掛かる。少なくとも10人くらいだな」

「ふーん……レベル上がんない訳だ。集団でタコ殴りとか、入るもんも入らないよね」

経験値はパーティを組んでもソロでもあまり変わらないが、パーティを組まずに共闘すると、トドメを刺した者にしか入らない。また、HPの少なくなった敵を倒しても本来の経験値は得られず、かなり減ってしまう。

なので基本的に集団で狩る際はパーティを組むのだ。ただしレベ

ル差が激しい場合取得経験値に差が出てしまったりするので、そこはまた別の話だが。

「そういえば、どれくらい騎士団にいるの？ ……あと何歳って事になってるの？」

「15年居る。最初の方は18歳と言ったから、33歳という事になってる」

「1000いくつのくせにね」

「お前もだろうが」

「……いや、ほんととは寝てた訳じゃなくて気づいたら荒野に居たんだよ。直前までは仲間と街に居たし、千年前だったよ」

「……そうなのか？ タイムスリップ、とかいう奴か」

「そうかもね」

ほんととは異世界トリップだけど、という言葉は口にしない。

流石に、この世界で生きている生き物に向かって、お前らはゲームのデータでしかないとは言えない。それに、トリップと言うと説明がつかないのだ。何しろ、千年前にプレイヤー達は確かに存在していたというのだから。

所詮造られた世界だと否定するのは簡単だが、生憎のことリノは楽天家の快樂主義である。人間関係の面倒ごとは嫌だが、適度な楽しみとスリルは望む所だ。

「それより、もう少し歴史を教えてよ。いつ頃人間の手助けなんて始めたの？」

「俺は最初は600年くらい前だ。全体としては結構最近で、300年くらい前にいいよのつぴきならない事態になりかけて——人類が滅びたら、戻って来た主が困るのではないか、という意見があったな」

「どんだけ……」

マスターコンプレックスと名付けてもいいかもしれない域である。
ヴィックルは真剣な顔で続けた。

「それまでは主君以外に従ったり、手助けしたり、という発想が無かった。しかし商売に携わっていた奴らから段々輪が広まって、今では大陸全体で同盟として活動している」

「ほー……話がでっかいね。同盟の名前は？」

「いつまでも主人を待つ者たちの同盟」

「せつなすぎるんだけど」

「略して、ISMだ」

「……ペットってもう少しこう、……いや、真面目、なのかな」

「真剣だぞ、俺たちは」

「真剣にネタに走ってるよね」

ちなみにこの世界の言語は日本語、外来語もしっかり混じり、更に文字はひらがなカタカナ漢字にアルファベットである。レイステイルは和製MORPGだ。

ゲーム内特有の文字もあり、それらは情報の記録などに使われるという設定で、古代アルテイル文字と言われていた。言語化は出来ないが、見ると意味が分かるという物だ。

アルテイルとはレイステイルでいう古代文明で、今ではレイステイルが古代扱いなので言うなれば超古代文明。アルテイルの時代には神が地上に居たとされ、何らかの理由で神が去って魔物が現れ、それから数千年後の時代がレイステイルの舞台だ。

一応レイステイルのメインシナリオはアルテイル時代の謎に関するもので、この先のアップデートで事実が判明していくのだろう、と思っていた矢先の出来事だったが。

「しかし設立300年の同盟か。盟主は？」

「リーゼ・ディヴァイン様だ。知っているか？」

「……ああ、至高人認定と特殊技能の……って、あの人がペット！？」

「あの方に主は居ないぞ。単に死んでいない中で一番強いからだ」

リーゼ・ディヴァインは至高人認定クエストと特殊技能習得クエストを出してくれるNPCだ。それぞれのクエストは彼が至高人の境地に辿り付いた時にやった修行、らしい。当然全NPC・モンスター中最高峰のステータスを持つが、現世には関与できないらしい。ちなみに種族・ジョブ共に当時は彼限定、半神族の仙人である。

現世とは言うものの彼は空に浮かぶ島で霞ならぬ雲を食べて生きていて、基本的には世界のどこかで下を見下ろして楽しんでるらしい。

「よく行けたね」

「……あのな。ペットにはモンスターも居るんだ」

「あ、そっか。飛べるね」

ぽん、と納得して手を叩く。遠くに小さく森が見え始めていた。

牛頭一家と遊び人

夕方ごろ、森のあたりまで辿り付いた。徒歩としてはかなり早い到着である。

数十キロ程度歩いたと思われるが、リノは全く疲労を感じていなかった。脇と胸あたりが僅かに汗で湿り、乾燥した空気のせいで少し鼻が痛い程度だ。

森の側に住んでいるという牛頭族、ミノタウロス大柄な牛頭の男ノッダルに出迎えられた。彼は一家でここに暮らしているらしい。

「ヴィク、大丈夫だったか？」

「ああ。行った時には解決していた」

「そりゃあ良かったな。腕利きの傭兵でも居たか」

「……いや……」

ちらりとリノを見る。彼女は明後日の方向を見つつ、ちら、と一瞬睨んできた。

「まあ、そんなものだ」

ヴィックルはそう誤魔化して、泊めてもらえるように頼んだ。

彼は息子と娘と暮らしており、よく此処を通る旅人や冒険者に部屋を貸しているらしい。魔除けの柵があるため、小規模なキャンプ

も気兼ねなく出来る。

森を通る商隊なども世話になっているようだ。

「また熊どもが降りて来たみたいだからな。行きに片付けてくれ」

「ああ、分かった。リノはいいか？」

「構わないよ」

2人ともが頷く。リノもこの辺りで経験を積みたいところだし、悪い話ではない。

何しろ未だ、意図的に生物を殺した経験がほとんど無いのだ。回避や嫌悪がどうこうの問題ですらない。VRゲームはある程度嗜んでいるので戦闘自体は問題なくとも、血が出たりするリアルな戦闘に己がどう反応するのか、リノ自身予想が付かないのだ。

「じゃ、泊まって行け。ホイッシュも待ってるぞ」

「……うっ」

「嬢ちゃんもどうだ、うちのアガの嫁にならんか」

「謹んでご遠慮するよ」

息子はアガ、娘はホイッシュというらしい。

若干顔を青ざめさせたヴィックルの背中を押し、3人は小ぢんまりとした丈夫そうなログハウスに足を踏み入れた。

——そして2人を出迎えたのは苛烈な洗礼である。

「ヴィッククうううううっ！」

飛び出してきたのは少女だった。といってもリノより背が高く胸も大きく全体的にむっちりしていて、まさに牛女だ。しかし顔は人間で、小さな角があり、牛のような耳がついている。

ヴィックルは極めて冷静に体を横にずらした。そのまま勢い任せ

に少女は外に飛び出し、思い切り顔面から地面に突っ込む。

「あっ……」

リノは小さく声を上げ、一瞬助けようか助けまいか迷った。しかし少女はぱっと起き上がると、またヴィツクルに突撃してくる。

「何で避けるのよ未来の旦那様あっ！」

「誰がだっ！！」

「あ・な・た！」

避ける、突撃される、更に避ける、それを五回ほどループしたあたりでリノは観察を止めた。恐ろしく生産性のない行為だと思った。ひとまずなければなしの礼儀を駆使してノッダルに改めて挨拶し、乱雑に撫でられて照れるやら痛いやら微妙な顔をした。

「ホイシュ」

そうこうしているうちにホイシュは兄によって首根っこを掴まれて漸く停止したらしい。外から戻って来た兄・アガは、ノッダルよりやや低い背で、なんとなく寡黙な雰囲気がある。

「よう、アガ」

「久しぶりだな」

アガはゆったりと挨拶し、暴れるホイシュを隣室に放り込んでドアを閉めた。乱雑な扱いだが、何時もの事らしい。

「そっちは」

リノはその声の対象が自分だと分かったと、なるたけ丁寧に見えるように挨拶した。昔からどう頑張っても慇懃無礼だと言われる性質で、苦勞する事もある。根底に目上への反抗心があるためか、ますます目の仇にされるタイプだった。

「俺はアガだ」

「どうも」

知ってるけど、とは言わない。軽く頭を下げ、いつもの通り笑みを浮かべる。優しげではなく、むしろ人をからかうような楽しげな笑みだ。

アガは暫くじっとリノを見て、不意に手をぼすんと頭に載せた。

「ちまっこいな」

「……ちまっこい!？」

女子としては低い方でも無い160センチメートルを小さいと言いつけられ、リノは巨大な手を払い除けて睨んだ。アガの背は確かに大きい。2メートルをかなり超えているように見える。

「おお」

細腕が易々と手を払いのけた事に感動したらしい。アガはがしがりしと更にリノの頭を乱暴に撫で、ますます怒らせる事となった。

夕食は猪肉を焼いたものや、キノコや野菜の入ったサラダ、それからスープにパン。これでも普段よりは頑張ってるんだぞ、と自慢げに言われた。

リノもキッチンを借り、このあたりでは食べられなさそうな食材

で料理を提供した。アサリのバター炒めは中々好評であった。

「うめえな、これ！」

「うちにお嫁に来ない？」

ホイシュにかなり真剣な目で言われた。アガ本人までもこくこくと頷いており、リノは唸りながら必死に首を横に振った。流石に異世界に来てから数日で嫁入りは遠慮したい。ついでに言うとなんかの顔をしている相手が望ましい。更に言うなら、本来の自分を知る者だと尚良い。

鏡を見たところ、前の自分より随分整った顔をしていたため、恋愛に精を出す気には到底なれないのだ。尤も、元々興味も経験もないのだが。

その日はホイシュの部屋に毛布を大量に重ねて敷き、古臭いベッドよりよっぽど柔らかな寝床で眠った。目が覚めるとホイシュが転がり込んでいたのはご愛嬌である。

翌朝、リノは紺の布を銀糸で彩ったブレザーに紺のスカート姿に着替えた。これはギルド【アルテマ】に2種類ある制服のうち、物理特化版のものだ。

魔力・知力・器用・魅力・幸運の80%ずつを足して4分し、体力・筋力・耐久・敏捷に均等に振り分ける。とことん固く強く、というコンセプトのある意味ネタ装備だ。もう1つの方は白で、そちらは逆バージョンである。コンセプトはそれぞれ、脳筋と紙防御。胸元には槍花車に山桜の紋という和洋折衷なギルド紋章が輝いている。

「……何だそれ、貴族みたいだな」

「うちの制服」

暑い、といって上着を脱ぎワイシャツだけの状態で朝食を作る。
のんびりした牛一家はまだ起きてこなかった。

今度は面倒なので調理スキルを使う。キッチンに置いた食材はふわりと浮かんで光を発し、勝手に調理されてホットサンドになる。

食べ物アイテムは様々な効果を持つ補助アイテムだ。料理の生産スキルによって作られるそれらは、高レベルになるにつれて必要性を増してくる。

特に遊び人は戦闘に役立つ類のステータスは心許ない。なので、身内以外との狩りでは必須といってもいいようなものだった。

生産スキルの中では比較的材料を揃えやすく使用頻度も高くなるため、上がりやすい。

ちなみにこのホットサンドだが、攻撃ダメージ＋5%。たかが5%、されど5%である。

与えるダメージが高ければ高い程効果が高くなるため、人気は高い。

「ノッダルさん達が起きてきたらすぐ行く？」

「そうだな。俺達の脚なら、急げば2日程度で王都だ」

味も申し分ない美味さのホットサンドをばくつきながら、今後の予定を確かめる。王都まではヴィックルが徒歩で急いで3日、だそうだ。本来馬車、精々騎獣で4、5日はかける道のりらしいが、やはり高レベルプレイヤーは体力も速度も段違いなのである。

更にこの時代、かつて使われたようなレベルの高い騎獣が捕獲できない。結果的に馬ばかりになってしまい、更に昔よりも移動速度

は落ちた。

「……思っただけど」

「何だ？」

「ランバード。乗ってく？」

ランバード。その騎獣の代表格で、見た目はダチヨウに似ているが首が太めでやや前の方についている。足はかなりがっしりとして人間1人なら楽々乗せて走る事が出来る。色はレベル帯ごとに別れて数色あり、まあようするにチョコ●ボのような鳥だ。

下からレベル50程度の赤と青、200程度の緑と紫、400程度の橙と水色、500〜1000は白と黒、稀に金銀。

リノは全色コンプリートした。足の早い高レベル種1匹さえ居れば問題ないので、完全に道楽である。

「居るのか。乗れば1日短縮できるな」

「うん。僕の、金のと銀のが居るし」

金と銀はそれぞれ一般モンスターではなく中ボス的な存在で、常に1匹しか居ない。そのため現れる度に血眼で捜されてすぐに仕留められていた。

リノが2匹を捕獲できたのは全くの幸運だった。

ゲーム内では騎乗すると速度がプラスされる代わりに命中率になり下がるが、今ならば訓練次第でどうにかなるだろう。

「そうか……ああ、熊退治だが、それは問題ないな？」

「久しぶりに戦うからフォローしてね」

「ああ」

久しぶりというか本当は始めてに近い。楽器でも十分に戦えるだ

ろうが、今回はちゃんと戦闘に慣れるために普通の武器を使おう、とリノは決めていた。

普通とは言っても持っている武器は遊び人専用品ばかりで、あまり武器という感じはしないのだが。

しかし近接武器から遠隔武器まで一通り揃っているため、割と何でもこなせるのだ。それこそペンから剣まである。武器の種類数では盗賊や探求者にも勝るとも劣らずだったりする。

「おはよおー……」

ばたん、とドアが開く。入ってきたのはホイシュで、ヴィックルを見るなりぱつと目を輝かせるのが愛らしい。ホイシュはヴィックルが好きなようだが、仲良くしているからといって己に敵愾心を向けたりしないためそこそこ気に入っていた。昔そういう経験があったためだ。

「おはよう。朝ごはんあるよ」

「きゃあ！ すっごおい、おいしそー、リノちゃん天才！」

ホイシュはヴィックルの隣に座り、ホットサンドを取って食べ始める。ヴィックルはガタンと音を立てて立ち上がり、「空気吸ってくる……」と呟いて出て行った。

「まあまああ、ヴィックル。少しくらい居てあげてもいいじゃないか」

「このまま隣に居ると食わせようとしてくるんだ」

「未来の夫婦だもの！」

リノは他人事なので牛頭族と狼人族の子供を見てみたいな、と暢気に考えていた。ヴィックルが逃げ出すと残念そうにホイシュがく

ねくねと体を揺らしている。

「んもう、恥ずかしがり屋さんっ」

恋する乙女って強い。リノはそう学んだのであった。

アガとノッダルが起きて来て、朝食を食べ終わると早速熊退治に出る事にした。リノはスキルをフル活用して熊の居るらしい場所を探し出し、ヴィックルと共に向かう。

武器は剣である。少し驚かれたが、本来の使用法には全く従わないので問題無い。

「あそこに居るな」

近づけばヴィックルも匂いで分かるようだ。一応慎重に近づき、のしのしと歩く巨大な影に背後から近づいていく。

「じゃあ行くか。レベル差は大きいが、一応気をつけろよ」

「うい」

今は核兵器でも死にそうにないHPであるとはいえ、痛みでショック死する可能性は無きにしも非ず。うっかり倒れこんできた木に潰されたりしたらどうなるか分からない。そもそも、HPがちゃんと機能するのも分からない。

リノはしっかりと剣を握り締め、締め付けられるような不快感を胸に感じながらスキルを発動した。

「——えいっ！」

《増殖幻影》は手に持った物を質量ある幻影として増やし、操るスキルだ。手に持った剣は使わず、浮いた剣で熊を突き刺す。

HPは一撃で尽き、熊は声も無く地面に倒れ付す。

「この調子なら大丈夫だな。まだ2、3匹居るらしいから2手に分かれよう」

「……うん。じゃあ、僕は右に行くから」

ああ、と言ってヴィックルが去っていく。そしてリノは剣を地面に突き立てると、はあ、と溜息を吐いて木に凭れた。

「……嫌だな、殺生は」

千年前に生きていたという、突然与えられた後付の過去。

それは案外重く押し掛かる。何せ、自分は戦いに生きていた者だと信じられていて――そしてリノも、否定する気はない。迂闊だったと言いか言い様が無いが、すっかりその“リノ”と同一人物であると話していたのだ。弱味など、見せられない。

主を失った彼らにとって、自分は唯一の希望だ。

もしかすると自分の主も現れるのかもしれない、そう思わせる希望。

「全く、馬鹿らしい」

ヴィックルの忠臣ぶりに絆されたか、とひとりごちる。元の世界では人に尽くす事など滅多に無いリノだが、現代社会にはとうに見られなくなったその“忠誠心”に柄にも無く感動してしまったのかもしれない。だから、精々英雄を演じてやろう、と思ったのだ。

けれど、せめて――それを共有できる仲間くらいは、居て欲しかった。

牛頭一家と遊び人（後書き）

普段余裕ぶってる子の弱った姿ほど燃えるものは無い！

王都へゆく遊び人

木に登り、リュートで曲を奏でる。モンスターを誘う効果のある《食人花の囁き》で、ふらふらと熊が2匹集まって来た。《増殖幻^{イシ}影》で1匹殺す。

最後の1匹は、己の手で剣を振るう。やはり命を刈り取る感覚はお世辞にも気持ち良いとは言えなかったが、これにも慣れるほか無いだろう。

「……まあ、ぶっちゃけ必要無いけどねえ」

戦闘になったとして、わざわざ剣で応戦する必要も無い。むしろ対多数ならば、演奏スキルの方がよっぽど向いている。聞こえる範囲全て殲滅できるのだから、よく考えてみればとてつもなくチートだ。

リノは残っていた剣を消し、実物もボックスに戻した。

死体を2つ引き摺って先程の所に戻ると、ヴィックルも1匹仕留めてきた所だった。

「2匹、よろしく」

「お前は運べるか? ……いや、邪推だな」

流石に大きさに持ち上げにくいため、《念動力》テレキネシスで浮かせて運ぶ。ヴィックルは真っ直ぐ森の外に向かい、そしてあっさりと抜けた。やはり嗅覚がかなり良いようである。

庭先にどさりと熊を落とし、おい、と薪割りをしていたアガに声を掛ける。

「……4匹か。3匹かと思っていたが」

「見つけてない奴だったんだろ」

「そうだな。有り難い」

アガは熊の死体を検分しつつ、じろり、とリノを見る。

「……お前も、戦ったのか？」

「まあ。2匹は仕留めたけど」

「そうか」

何故か嬉しそうな目で死体を解体し始めた。不気味である。

リノは胡乱な目つきでそれを見つつ、じゃあ後は任せて出発しよう、とヴィックルに声を掛け――

「きゃああヴィックルうううう！ かあっこいい！」

「来るな！」

ようとして、諦めてノッダルに挨拶しに行った。

1時間ほどしてから漸く出発した。金銀の艶やかな毛並みをしたランバードは、大きめの嘴に駝鳥のような体と、太い首と足を持った鳥である。

「久しぶりだから感覚が掴めないな」

実際はポニーくらいしか乗った事が無い。真っ赤な嘘である。

身体能力はこれでもかという程強化されているので、乗る事には問題が無い。鞍に跨って手綱を握ればそれだけでいい。

また幸運な事に、何故か彼らの言葉が理解できた。

『お嬢様、どちらへ？』

丁寧口調な銀色のランバード、ヤンバル。耳に届くのは「クルルルル」という鳴き声だが、頭には言葉が入ってくる。

『何だかこのあたりも変わったねえ』

のんびりした金色のランバード、クイナ。ヤンより落ち着き無く動き回り、彼に乗るヴィックルに宥められて鳴いている。2匹合わせてヤンバルクイナだ。

ハンシンのような神獣系のモンスターは元々喋る。しかしランバードは紛れもなく、喋らない類のモンスターである。

(……妖精のはしくれだから?)

とりあえずはそういう事にして、どう話しかければいいのかよく分からなかったため、ヴィックルに方向を確かめてから指差した。

『畏まりました』

リノがほんの小声で「よろしく」と言いながら首を撫でると、嬉しげな意思だけが伝わる鳴き声が帰ってきた。

ランバードはメジャーな騎獣だけあって、上下の揺れも少なく、また無意識に風を操って主に抵抗を与えない術を知っているため快適に乗れる。

適度に頬を撫でる風は心地よく、勝手に目的地に向かってくれる優秀なペットに任せてリノは景色を見ていた。

「飽きた」

「我慢しろ」

「だるい」

「我慢しろ」

「眠い」

「落ちてもいいなら寝ろ」

「ひどいー」

しかし元より移動にロマンを見出せないタイプである。景色よりは町の方が好きだ。最初こそ鬱蒼とした森も神秘的に見えたが、よく考えればもう入った場所だ。

リノの我侬も親しさ故の気安さから生まれるもので、まあ度が過ぎなければヴィックルも気にしない。何せリノと違い、彼は真正正銘千歳以上。精神的に老成されている。

「あ」

不意に声を上げる。リノの視線の遥か先に、僅かな明るみが見えていた。

「良かったな。景色が変わるぞ」

車のような速さで駆けているため、見えた明かり――森の出口はすぐに近づいて、あっという間に通り過ぎた。

今度は荒野ではない。短い草が生い茂った広い草原となだらかな丘がある。

「ますますつまらないし……」

不服げに呟いたリノは、今度こそ気だるげにヤンバルの首に腕を巻きつけてぐったりとした。元の世界にもありそうな草原には、動物やモンスターの影もあまり無い。

トランプを出して弄びながら、暇な道程は続いていた。

それから3時間ほど経ち、休憩を入れる事にした。少し脇道に逸れた所に川があり、そこでランバード達も休ませる。

リノは食材を取り出してスキルでサンドウィッチを作り、地べたに座ってかぶりついた。

「後どれくらい？」

「6、7時間って所だな。思ったより早い」

「うー……もっと早く」

「金銀のは初めてだが、まあもう少しなら出せるんじゃないか」

そうなの、という目でヤンバルとクイナを見る。彼らは頭を上げて自信ありげに言う。

『今までの倍は出せます』

『いけるよおー』

「倍はいけるって」

「……鳥と会話できるのか、お前は」

「さあ？」

とりあえず誤魔化しつつ食べ終え、お茶を取り出して少し飲んだ。水筒ではなくポーション用大瓶と同じ容器に入っているため、なんとなく薬でも飲んでいる気分になるが。

容器は大きさも用途も様々で、主に料理と錬金の生産スキルに使用する。錬金は主に薬や毒などを、料理は液体調味料や飲み物を生産できる。

容器のサイズが大きければ必要な材料の量も増えるし、再使用可能^{タイム}時間も長くなる。しかし効果時間も長くなるし、大きければ大きい程得^{クール}だったりもする。

また使用する瞬間はスキルが発動できないため、自分のスタイルに合わせて調合する事が推奨される。この硬直時間も容器のサイズによって長くなる。最長で2秒程度だが、それでも隙になるのだ。店売りPOT(Potionの略)は初心者まで、が合言葉である。

ちなみにポーション類は投げて当てれば他人にも効果が出る。この場合拘束時間は無いが、少しHPが減る事もある。たまにこれでトドメを刺される事があるため注意が必要だ。

「じゃ、行こうか」

「ああ」

餌と水で十分に元気になったランバード達は、張り切った様子で鳴き声を上げた。リノは出た時より慣れた様子で鞍に跨る。今度はこちらと逆に、リノがクイナに乗った。

ヴィックルもヤンバルに乗って、合図すると同時に2匹は競うように駆け出した。

現在の王都がある場所は、ゲームではアティナという都市があった。なかなか大きな都市だったが、今は更に大きい上に外壁の中心に城を建設し、更に外側に壁を増やし、と巨大化しているらしい。

リノとヴィックルは今のアーティアレストについて話しながら、割ととんでもない速度で進んでいた。具体的に言えば時速2百キロ弱出ている。

「へー、ヴィックルは真紅隊」

「ああ」

アーティアレストの騎士団は軍と似たようなもので、第一から第五まである。それぞれ色が決まっており、隊の名も同じ。紺碧、紫紺、真紅、山吹、若竹とある。

この世界の公用語は一応日本語なのでおかしい訳では無いが、リノからすれば国自体が西洋風なのにこの名前なのはなかなか不思議というか中二病じみて見える。

序列は無いが、紺碧と紫紺には貴族出身が多く、真紅は貴族平民問わず実力者が入り混じり、若竹と山吹は殆ど平民出身だ。

また、真紅隊には武術大会等で上位に入った者が多いらしい。

「普通は貴族、平民、で纏まるんだがな。だからうちは色物だと言われる」

「へえ。仲良い？」

「隊の中ではな。貴族の騎士を指して青紫、平民の騎士を指して黄緑と言うんだが、内部は仲が良くとも隊同士で対立している。当たり前といえど当たり前だが」

「ふーん……」

「貴族からは平民とつるむ恥知らず、平民からは貴族に与する裏切りもの、そんな感じに見られるのが現状だ」

仕方ない、というように溜息を吐く。人間を見守ってきたからこそ、その現状に呆れるやら心配するやらの複雑な気持ちなのだろう。彼自身は貴族ではないが平民とも言えない立場だが、数多くの死を見ている故に、人間が根本的なところで平等だと知っている。

——だからこそ、死んでも復活する自分たちを人間の枠から外して考えているのかもしれない。

「貴族と平民が対立する自体、何か違うような気もするけど」

支配する側される側。同時に、奉仕し合うべきでもある。民のために善政を敷き、領主のために労働するのが正しい在り方。

というのがリノの認識する建前だ。無論、そうできる人もいればできない人も居ると分かっている。

「貴族つつつてもな。今じゃ領地持ちの貴族なんか一握りで、殆どただの金持ちと変わらないからな」

「あー……。人の住める場所が減ったから？」

「ああ。今は配下として領主の所に別の貴族が派遣される形になっていてな」

（……与力大名みたいな物かな？）

なんとなくそう解釈する。同時に、プライドの高そうなイメージのある貴族がよく了承できたものだと思った。ヴィックルはその考えを読んだように笑う。

「一時は本当に大変だったんだ、この国も」

「ふーん……」

「まあ、そのお陰で貴賤を問わずに実力者を引き入れ、戦力の育成にも力を入れるようになったからな」

「不幸中の幸いだね」

「それまでは騎士団ではなく軍で、平民は等しく兵士でしかなかったからな。今ではこうして平民も人を率いる事が出来る。あるべき形に戻ったとも言えるが」

確かにそれもそうだ。元よりゲームでは何の身分もない冒険者が大規模戦闘の陣頭指揮を取っていた。

実力者が上に立つべきなのは当然だし、元の世界より尚更実力主義であるべきなのがこの世界だ。お飾りの指揮官などを就けていれば、命が幾つあっても足りない。

「なるほどねえ」

草原地帯から林に差し掛かる。少しずつ葉の増え始めたような様子の木を見て、リノは漸く今が春なのだろうと思った。前に通った森は恐らく常緑樹ばかりだったのだろう。

薄っすらと空気は肌寒いが日光が暖かい。こんな日は家でずっと布団に潜っていたかった、と思った。

王都——アティナータの巨大壁が見え始めたのはそれから1時間程の事だ。

遠目に見ても、とてつもなく大きい。視界に入る地平線の三分の一程もあるその縦横に巨大な壁には、流石にリノも感嘆した。

「へー、すごい」

「……それだけか」

「これでも感動してる方だけど」

ややスピードを落としながら近づく。段々と大きくなる壁の高さは、元の世界でもそうそう無いようなものだ。

地面の間際にちんまりと見えるのが入り口だろう。遠いからこそ小さく見えているが、恐らく近づけばもっと大きい筈だ。

「……うふ」

「？ 何笑ってんだ」

リノは楽しげに笑う。スキルではなく、生まれ持った彼女の直感が“面白いもの”がある、と告げていた。

それが何であるかは、まだ分からない。

「楽しみだなんて」

「そうか。……そういや、王都に着いたらどうするつもりだ？ 宿

くらいは紹介できるが」

「暫く滞在して情報集めかな。そういえば今の時代って、依頼クエストはどうやって受けるの？」

「世界規模の組織が仲介してるぞ。たしか3、400年くらい前からやってるんだったか」

「……アバウトだなあ」

長生きするところも時間の感覚が適当になるのか、とリノは溜息を吐いた。

王都へゆく遊び人（後書き）

ランバードはトリウマ（ナウシカのあれ）かチヨ●ボだと思っ
てく
ださい

王都来訪の遊び人

騎士であるヴィックルがいるため、王都に入るのは簡単であった。本来身分のない者はもう少し手続きに時間がかかるのだが、ヴィックルは下っ端ではなく多少の地位があるので割と融通が利くらしい。

「権力もたまにはいいものだね」

「……まあ、その分責任も伴うがな。で、どうする？」

「んんー……まあ、居心地の良さそうな宿を紹介してくれるかな。高くてもいいから」

初めて見る街並みを興味深そうに見る。ゲームでの街並みよりもリアルさは増し、人は多い。雰囲気はヨーロッパとアジアの中間だが、あまり発展はしていなさそうだ。衛生状態は悪すぎる程では無いが良いとも言えない。

今いるのは外から二枚目の壁の内側だ。1番外側のあたりにはのどかな田園地帯が広がり、内側に行くに連れて家々が並んでいた。そしてもう一枚の内側に入れば打って変わって賑やかな街が広がり、喧騒を見せている。

「どうせならもう1つ上の層に行くか？ 治安も良いし」

「別に治安はどうでもいいんだけど」

「いくら強くても数の暴力は侮れん。集団で襲われたらどうする」
「……まあ、そうだけど。体力は無いしね」

治安は確かに良くはない。荒々しい男たちが闊歩しているのは仕方ないのかもしれない。基本的に冒険者や傭兵はこの層を拠点にしているからだ。

1つ上の層には下級貴族の屋敷や高級な店が並んでいるらしい。

「ここだけの話だが、殺人事件が増えている。巻き込まれたくないだろう」

「それはそうだね。よし、あの宿にしようか」

「人の話聞いてたか？」

「よく聞こえたよ」

笑顔で言うリノに、ヴィックルは盛大な溜息を吐いた。

安宿に泊まろうとするのを引き止めつつヴィックルが紹介したのは、この付近では高めだがしっかりした建物の清潔な宿だった。四角く白い建物の外側には洒落た窓やベランダがあり、観葉植物なども置いてあって中々美しい外観である。

中に入ればちよつとしたホテルのロビーのような空間が広がっている。建物自体がそう大きくないため広さは無いが、幾つかテーブルや椅子が置かれ、談笑している者も居た。

「部屋、空いてるか？」

「おやおやこれは騎士殿。2人部屋でございましたら丁度空いております」

「……何をニヤニヤしてるんだお前はっ！ 1人部屋だ1人部屋。俺は宿舎に住んでると知っているだろうが」

「ええ、存じておりますよ。しかし騎士団の宿舎に女性は連れ込めませんしねえ」

「だっ……！」

どこにいても苦勞人らしい。放っておけば際限なくからかわれ続けそうだったので、リノは助け舟を出した。

「ヴィックルには牛頭族ミノタウロスの可愛い彼女が居るから。僕は友達だよ」

「おまつ……おい！」

全く助け舟になっていないが。

受付の男性は白髪の混じった初老の男性だ。10日滞在で三食付きと伝えつつ、ポケットに手をつ突っ込んで見えないように金貨を取り出す。代金は日本円に換算するとかかなり高いが、そもそも向こうでホテルに泊まる経験もさほど無かったリノは、これくらいか、と思いつつカウンターに金貨を置く。

男性は驚く様子もなく受け取り、お釣りを返す。幾らかの銀貨と品貨、銅貨だ。よく考えると全て始めて見るものだが、今は観察したりせず無造作にポケットに入れた。

「こちらが鍵になります。宿を出る際はこちらにお預けください」

「うん」

「お食事の方はあちらの食堂で。前日までに仰ってくださいればお部屋にお届けする事も出来ます」

「なるほど。……ああ、じゃあ朝食は毎朝、7時に部屋によろしく」
「畏まりました」

つまりルームサービスだろうか。なかなかサービスの行き届いた宿で、説明を聞いたびリノは感心した。高いのも頷ける。

にこやかに案内を申し出てきたが、ヴィックルにやらせるから、

と断る。どうやら何度も泊まった事があり、しっかり建物を把握しているようだった。

鍵に書かれた部屋番号は、7号室。階段を上がって、廊下の1番奥にある部屋だった。

「じゃ、ありがとね」

「ああ。何か用があったら、真紅隊の第7屯所に来い。場所は人に聞け。いいな？」

「世話焼きのお父さんだね、本当に。わかったって」

すっかり情が移ったのかもしれない。何度も確認しつつ、ヴィツクルは去って行った。取っていた休暇の日数的には既にアウトらしいが、クビにならなきゃいいな、とりノはとりあえず祈っておいた。もはや認識はリストラ寸前の過保護なサラリーマンお父さんである。

部屋に入ると、そこは小奇麗なごく普通のホテルの一室のように見えた。白い壁、落着いた紫のラグ、これまた白いテーブルと椅子、ベッド、カウチ。

この部屋だけを見れば、全くゲームの世界とは思えない。リノは靴を手早く脱ぎ捨て、ぼすんと柔らかなベッドに埋もれる。

（疲れた）

1人になると、途端に気持ちが沈む。人が居るのも疲れるが、人が居ないのも嫌いだ。

こういう時、いつも居てくれたのは幼馴染だった。

（……居ないなんて、そんな訳は無いさ）

リノは白い指でシーツを握り締めた。

同じ世界にいないなど、想像も付かない。それほどまでに、常に繋がりがあって、離れることなど無かった幼馴染。

それが、今は一筋の糸すら見えない。

(そんなわけ、……)

浅い息を繰り返す。抱いたことのない感情が、じわじわと喉からこみ上げるようにして溜息に変わる。ぽつりと、吐き出すように何かを呟いて、リノはそつと目を閉じた。

目が覚めると日は暮れていた。ぼんやりと空の一部だけが僅かに明るく、日が落ちたばかりだと判断する。

「ごはん……」

きゅう、と腹が鳴る。着替えも面倒なので、アイテムから服を選択して一瞬で着替えた。

モノトーンのワンピースにニットのカーディガン。装備アイテムではなく、効果のあまりない衣装アイテムだ。こうして見れば、どこぞのお嬢様に見えなくもない。

リノは鍵を手に取り、部屋を出た。

食堂は案外広く、落ち着いた雰囲気だった。白いテーブルクロスが掛けられた丸いテーブルが幾つも並んでいて、食堂という言葉の大衆的なイメージが無い。生意気にも間接照明で照らされ、ムードがある。なかなかやるな、とリノは感心した。

適当なテーブルに着くと、すぐに給仕がやって来る。食べられな

いものは無いかだけ聞かれ、リノは「虫と蛙と蝸牛は食べられない」と述べた。出しませんよ、と笑われたが。

この世界の食事情は、日本とさして変わらぬ和洋折衷ぶりで、珍味の類はあまりない。精々モンスター類の肉が出たりする程度だ。そのモンスターに色々アレなものが含まれていたりするのだが、昔、というかゲームでは食材としてドラゴン肉などがあったが、今となってはレア食材になっている。単純に、倒す事が出来ないのだろう。

百人がかりの力押しでやっと150〜180レベルのドラゴンが倒せる、程度だ。そもそもステータスに非常に恵まれているドラゴンは、レベルが低くとも脅威となる。

「お待たせいたしました」

つまりドラゴンを狩れば一攫千金じゃないだろうか。

リノの脳裏にそんな思考が過ぎったとき、料理が運ばれてきた。人だった時よりかなり鋭敏な嗅覚が、その匂いを捉える。

（これは……）

ごくりと喉を鳴らした。給仕の青年が笑みを浮かべ、テーブルの上にそれを置く。

「キリヤニカ卵のオムライスですよ」

（待て、なんかまた子ども扱いされてないか！）

茶髪に鳶色の目をした温厚そうな青年は、にこにこ微笑ましながら料理の説明を一通りして去っていった。リノは不服げにしていたものの、一口食べるなり満足げに微笑む。

美味しい。とてつもなく、美味かった。

キリヤニカ鳥は鶏にも似た姿の、しかしやや大型で色も様々な鳥だ。モンスターではあるが、ノンアクティブ、つまりプレイヤーを見ても攻撃してこないタイプである。

その卵は最高級品らしく、クエストでもよく対象になる。

リノはこれでもかというほどゆっくりじっくりと味わって食べた。ちまちまと口に詰め込んでいく様子が小動物のようで可愛らしく、やたら視線が集まる。

やがて食堂も混んできて、テーブルが埋まり始めた。

「お嬢さん、相席して構わないかな」

ふ、と影が差す。顔を上げると、背の高い男であった。リノはまだ口に物が入っていたため、こくりと頷く。

テーブルは1人用ではなく2人用らしく、向かいにも椅子がある。

「ありがとう。いやあ、こんな可愛いお嬢さんの前が余ってるなんて幸運だね」

なんとも気障な台詞に、リノは嬉しがるでもなく嫌そうに眉根を寄せた。気色悪い。

金茶のウェーブした髪に緑の目をしていて、顔は整っている。美形すぎるという程でもないが、モテそうだ。

「……口説きたいのなら、あそこに綺麗な女性がいるじゃないか。ロリコン？」

自ら子供扱いしたが、それはそれ、これはこれである。利用する時は利用する。

男は怯まずに笑う。

「やだなあ。立派なレディじゃないか」

ぞわりと鳥肌が立った。リノはこの手の男が嫌いだ。というか口説かれるのが嫌いだ。

隠す事無く不機嫌さを出すが、男はにこやかに給仕と会話して全く意に介さない。小娘の癩癩程度、どうにも思っていないかのよう

に。

更にリノの機嫌は悪化した。子供扱い以上に小娘扱いは腹が立つ。

（とっとと食べて帰ろう）

憤懣やる方ない気持ちでスプーンを握り締める。握力が強化されている所為で、僅かにぐにやりと形を変えた。それに気づきもせず、リノは食事を続ける。

先程までとは打って変わって早食いだ。

「まあ、そう急がないで。ちょっと聞きたいんだけど」

「……チッ」

隠す事なく舌打ちが出た。言う事を聞く気はないのだが、次に男が言った言葉に、リノはスプーンを動かす手を止める。

「金髪に青い目の戦士についてね」

軽く目を見開く。驚いたが、余裕は捨てない。

リノはスプーンを置き、心を落ち着けるためにグラスを手にとって、入っていた果物のミックスジュースを喉に流し込む。またも子供扱いされている事は頭から飛んでいた。ちなみにこの世界では1

6歳から酒が飲める。リノは合法的に飲酒が出来るというのにこの扱いであつた。

「聞かせてもらうよ」

にや、と眼前の男が満足げに笑った。

「レオ、という青年が王都に現れたのはつい5日前」

レオ——玲央。本名と同じ、キャラクターの名前である。
慣れ親しんだ幼馴染の名。嘘ではないようだ、と少し警戒を緩める。

「彼、とても巻き込まれ体質みたいでね。ついでにハーレム体質みたいで、本人は逃げてるのにやたらと事件に巻き込まれて、今は3人くらい女の子侍らせてたかな？」

「……」

びき、とりノの周囲の空気が凍った。笑顔が怖い。前例があるため、その様子は簡単に想像が付いた。

容姿が変わっていいように——いや、むしろ良くなってしまっている。確実に、その体質は悪化しているのだろう。

「確か公爵令嬢と巫女と冒険者だったね。……おや、怒ってるのかな？」

「……いいや。人が探してあげてる最中に、女の子とキャッキヤウフフしてると思うとねえ……腹が立つなあ。ああ、怒ってるのかなで？」

「青い髪に金色の目をした猫妖精ケット・シーを探してる、て言ってたよ。……

今時珍しいからすぐに分かったけど、君の事だろう？ でも、周りの子たちの所為でなかなか探しにもいけないらしくてね。で、僕らが買って出た訳なんだけど」

更にいい笑顔になった。それを見て、男が楽しげに問う。

「で、実際どんな関係なの？」

「幼馴染」

「へえ？」

からかうように言われると、リノの浮上しかけていた機嫌が急降下する。

男は柳のように受け流し、涼しい顔で運ばれてきた食事を口に運びながら話を続けた。

「そうには見えないけど。彼、いくら言い寄られても流すし、あげくの果てに幼馴染が、とか言ってる。面白いよね」

「わあ面白い。……そういう発言が回りに勘違いさせるっていくら言っても分からないんだからなあ。悪癖というか、もう、……」

言葉を切る。にっこりと笑いながら、内心で呪詛を吐く。

「君には全く気がない訳だね？ なるほど」

「で、居場所？」

話につき合う気もないらしく、リノは笑みを浮かべたまま言う。

男はにこにここと笑いながら、告げた。

「王城に滞在中だよ」

「それはどーも」

グラスを置く。デザート最後の一口を胃に収めると、リノは立ち上がる。

「もう行くの？ 残念だな」

「道化と道化じゃ相性悪いからね。手足が出ないうちに帰るよ」

「おやおや。愛しい彼に繋ぎを取ってほしくはないのかな」

「うざい」

最後に心底嫌そうな顔をして、リノは立ち上がった。一刻も早く、この胡散臭い男から離れたい。王城に滞在中のレオと知り合えているという事は、城にいるような身分なのだろう。

まあそんな事はリノにとっては知った事ではないのだが、関わりたくない人種である事は確かだ。城くらいなら、行こうと思えば行ける。難しいことを考えなければ普通にジャンプして壁くらい飛び上がれる筈だし、体裁を気にするなら普通に行けば良い。

ゲーム時代の話だが、冒険者は城に入る事を許されていた筈だ。今でも然るべき手順を踏めば簡単に入る事が出来る、とヴィックルに聞いている。

嫌な感じの視線を背後に受けながら、リノは不機嫌顔のまま食堂を去って行った。

王都来訪の遊び人（後書き）

強気な女の子の弱ってる以下略は以下略

ひとりごちる遊び人

リノは部屋に戻り、軽くシャワーを浴びることにした。体を綺麗にしたいし、どうもイライラしているのですっきりしたかった。

「……しかし、あの馬鹿め」

青い髪を湯で流しながら、いらついたように呟く。しなやかな体を流れていくお湯は温かいが、リノを落ち着かせはしない。

——二重の意味で腹立たしい。

「僕だって、まともな女なら文句は言わないさ。……だがね」

近く、そして遠い幼馴染に忠告するように呟く。

「君に惚れる女が何を嫌いか、熟慮していただきたいね」

冷たい壁にぺとんと背中を付ける。そして、はっと顔を上げた。恐る恐る背中に手を回し、つう、と下に滑らせていく。

(……何これ)

そこにはまるで尻尾の名残りのような、つんと飛び出た何かがあった。

リノは毒気を抜かれ、溜息を付いて濡れた床に座り込む。

猫妖精ケット・シーの体に、今だ謎は多い。

「あーもー……」

そして独り言を連発していた事に恥ずかしくなり、白い頬を僅かに染めた。



一晚寝て落ち着いたリノは、ひとまず再びヴィックルの所に行くう、と部屋を出た。そもそも城に殴りこみをかけようにも、場所すらよく知らないし、勝手が分からない。

カウンターに鍵を預けて第7駐屯所の場所を聞いた。

「通りを出て左に進んで、突き当たりを右に曲がればすぐお分かりになると思いますよ。」

真っ赤な建物ですから」

リノは礼を言い、朝方の街に瀟洒な佇まいを見せる宿から出て通りを歩き出した。

このあたりは店は少なく、宿が並んでいる。突き当たりに差し掛

かるとやや人通りが増え始め、どうやら朝市のようなものが行われているのだと分かった。

布を敷き、新鮮な食材を売買する人々。中々縁の無い光景でもある。

とはいえ満腹であまり興味を見せないリノは、途中ごろつきらしき男に絡まれつつ普通に対処して引き摺って歩いていた。ついでに駐屯所とやらに突き出そうと思ったのだ。

「たのもー」

両手が塞がっているの、足で扉を蹴り開く。

椅子にだらしなく座りうつらうつらとしていた男が、ぼうっとした顔でリノを見た。

「は？」

「ヴィックルなんとかっていう人に会いに来ただけ。あとこれは、朝っぱらから人身売買活動に励もうとしてらっしゃった仕事熱心な人たちだけ。ああ、治安悪」

愚痴に皮肉を投入して、ついでに2人の男を投げるように床に置く。気絶していた2名が呻いたが、気にしない。

男はぼんやりしたまま、とりあえずリノの言葉を頭の中で繰り返す、最初だけを実行する事にした。

「お前な……」

暫くすると呆れた顔のヴィックルがやって来る。リノは先程まで男が座っていた椅子に我が物顔で座って手をひらひらと振った。

先日からのストレスを発散したのでいい笑顔だ。

「城に行きたいんだけど」

開口一番そう言うと、その突拍子の無さにヴィックルが溜息を吐く。

「仕官でもする気か」

「え、頭沸いてる？　　ないない」

「だろうな……何の用があるんだ？　　まさか謁見とかしないよな？」
「ないない」

アーティアレストにおいて、城に入る事自体は案外簡単だ。申請すれば1時間足らずで審査が行われ、許可が出る。危険物の持ち込み禁止、目的を明確にする、その程度。

やはりゲームであった頃の名残りなのだろう。ゲームでは許可も何もなく普通に立ち入れたし、王の間まで行っとうろついても何もなしだ。今は流石にそこまでではないが。

「探し人がね。城に居るんだって」

楽しげだが、何故か薄ら寒い空気を感じた。手錠で気絶していた男達をとりあえず拘束しつつ、ヴィックルは両腕をさする。

「そうか。……あー、なんだ、まあ繋ぎくらいはやってやるから殴り込んだりするなよ」

「やだなあ、」

そう言っ言葉を切る。その先が無い事に物凄く不安になった。

「暴れないにしても、だ。侵入する気も無いんだな？　　無いよな？」
「うーん？」

「だからその曖昧な返事をやめろ！」

この街で彼女に繋がりがある（と思われる）のはヴィックルと宿の主人くらいだ。何かやらかせば思い切り累が及ぶ。

リノは兎も角、ヴィックルはいくら格下とはいえ集団で掛かれればそう勝てはしない。剣騎士である彼は、バスタード戦士ほど攻撃力が無いのだ。負けないが、勝てない。そうなれば時間経過により徐々に不利になる。

まあそこまで考えるのも早計というものだが、出来るだけ立場を悪くはしたくない。死んでも死なない彼らだが、疑われないためにも復活には出来るだけ時間を置く。ヴィックルはこの王都に愛着があり、主を待ちながらも出来る限り守りたいと思っている。

「心配しなくても、いきなりそんな大それた事しないから」

脅かしすぎたか、と笑いながら言う。

いきなり皇居にテロでも仕掛けるようなものだ。世界が変わり己の力が変わっても、心が変わらない以上やる気にはなれないし、出来るだけ人は相手にしたくない。

「……そうか、信じていいんだな？」

「さあ？」

「おい！」

心配だ。物凄く心配だ。リノは兎も角、突撃された城の面々の精神が心配である。散々おちよくられるのだろうな、と彼女の拠点ホームを思い出して溜息を吐く。

「とりあえず、……まあ、手紙を書け」

「ああ、うん。筆記用具貸してくれる？」

「ああ。その前に、こいつらを置いてくる……そういやどんな風に絡んで来たんだ」

「……んー？ ああ、えっとね。ほんと腹立つんだけどー、『お貴族様の娘が家出中かあ？ 攫われたって文句言えねーぜゲヘヘ』って感じに」

「……」

「腕捕まれそうになってね、条件反射で股蹴っちゃった。もう片方は腹に一発。てへ」

ヴィックルが沈痛な面持ちで2人を連れていく。

引き摺らずに持ち上げて連れていったのは、果たして優しさなのか同情なのか、それとも別の物か。それは彼のみが知る事である。

リノは手紙をレオに預け、今度はこの街にあるというトイストア・リトルクラウンの支店に向かっていた。

ゲームではさほど力を入れておらず、一軒だけ店を作って適当に商品を入れて放置状態だったのだが、どうやら今となっては各都市に支店を持つ老舗のようだ。

店主に設定したペットが悪徳商人エチゴヤだったのも良かったのかもしれない。

悪徳商人はボスモンスターだ。主に銭を投げる。投げまくる。当たるとこちらの所持金は増えるが数秒行動を封じられた隙に、ジュラルミンケースやら宝石類が雨あられと降る。ダメージはえげつない。

とはいえ改心状態にあるペットとしては、知力と魅力が高いため交渉に適し、店番や店主として良く採用されるモンスターでもある。

「いらっしゃいませー」

ヴィックルに貰ったメモ通りに来てみれば、リノがデザインした店より大人しめの小奇麗に纏まった店である。色とりどりの玩具類があり、目にも楽しい。

店員は確認してみると普通の人間……というか、ホビットが多い。NPC限定種族であるホビットは、鼻が高く耳の長い小人で、身長は100cm程度だろうか。顔立ちは総じて西洋系である。

「……えーと」

来てはみたものの、どうするか。ペットが此処にいるのであれば会いたい、と言えれば会わせてもらえるのだろう。

リノは手慰みに棚に置いてあるぬいぐるみを手に取って眺めながら、ぼんやり考える。会ったからどうという訳でもないが、探していたのなら会う方が良さそう。

「お客様、こういったものをお探ですか？」

「んー……？ ああ、僕か。そうだね、いたずら系のやつ」

特におもちゃが欲しい訳でもないが、店内に居るのだし折角なので品揃えも見たい。どうやら開店時のリノの好みはしっかり反映されている。ペイントボールやらトラップ系のアイテムやらと各種取り揃えていたのは完全にリノの好みだった。

店員のホビット男性は悪戯系おもちゃのコーナーに案内してくれた。なんとも年齢不詳だが、どうやらリノを子供だと思っているように微笑ましげな顔である。

（いや、おもちゃ屋に来ておいて子供扱いするなどは言えないけどさあ）

弟妹へのプレゼントを買いに来たとすら見てもらえないのは切ない。

(160センチにまで伸ばしたって言うのにこの扱い……)

毎日乳製品とにぼしを欠かさなかった彼女としては切ないところだ。

元の顔も童顔だったが、今は整いすぎて更に童顔になった。胸が大きくないことも原因のひとつだろう。小さくもないが、大きいとまでは言えない。

胸はいらないが、身長は欲しかった。最初こそ自分より背の低かった幼馴染に追いつこうとしていたのかもしれないし、気紛れかもしれない。もう覚えていなかった。

「――今帰ったわ。売れ行きは？　ふうん、そう、ゼロ、ゼロね……あああ今月どうしましょ……やっぱりまた小金稼ぎに行くしか無いのかしら」

昔懐かしいブーブークッションを手にとった時、そんな騒がしい声が聞こえてきた。若くはないが、張りのある女性の声だ。

女性はレジの側にあるらしい裏口から入ってきて、カウンター裏に立って店内を見回す。すらりとした肢体で、街中ではあまり見ないパンツスーツ姿である。

「って、あら？　珍しいこともあるわね。……いらっしやいませ！　……ん？」

張り上げた声に、リノが横を――通路の向こう側に見えるカウンターを見る。ド派手なピンク色に青のメッシュを1本入れたショートヘア、飾り付きの細いフレームの眼鏡を掛けた女性。爛々と輝く、

仕事への意欲が詰まったような目は燃えるような赤。

会社勤めよりはブティックのオーナーでもしているような雰囲気である。

というか玩具屋には全く似合わない彼女は、はっとしたように口をぽかんと開けた。

（おや）

見覚えがある。——という事は、そういう事か。

そう納得する前に、リノはカウンターを飛び越えた女性に熱い抱擁を受けていた。

「……うん？」

「きゃあああああ！」

耳元で絶叫され、きいんと響いたそれに思わず耳を覆おうとしたが女性の腕が邪魔して出来ない。結果、耳をつんざく悲鳴にぎゅうと目を瞑るしかなかった。

「きゃああああ！ ご主人様あああああ！」

「ちょっ、うるさい！」

「お帰りなさいませええええええっ！！！」

今度こそ鼓膜が破れるかと思った。

——悲鳴のスペシャリスト、泣き女^{バンシィ}のヴィヴィアン。リノがそう名付け、更に容姿に魔改造を加えた彼女の悲鳴は、戦闘にも使うだけに凶悪極まりなかった。

泣き女と遊び人

べったりとリノを抱き込んで離さないヴィヴィアンを適度にあらいつつ、カウンター裏のスタッフルームに案内される。

1番いいソファに座らされ、店員らしき女性に紅茶を出され。きびきびと店員に指示しながらも、きらきらと輝く赤い瞳は視線で挟りぬかんばかりにリノを見つめている。

ヴィックルの様子で想像はしていたものの、実際向けられると凄まじい忠誠心……もとい、執着または偏執、である。

「ご主人様……私、私ずっと待っておりました……うふ、ふふふ、なんて幸運かしら。私が1番にご主人様に会えるだなんて……」

「ハンシンとヤンバルとクイナには会ったけどね」

「あうっ！ ……あいつら、どうして知らせないのかしらっ、もう！ ぬか喜びじゃない！ でもお会いできて……うふ、うふふ、嬉しいですわ！」

とろけるような目で見つめながら腕が伸びてくる。リノは僅かに、ほんの僅かに口元を引き攣らせながらも笑顔を崩さなかった。見上げた精神力である。

「えーと。ここ、支店なんだよね」

「はい！ 第二号支店ですわ！」

「……いくつあるの？」

「五つございます！ 店舗の維持と資金集めは万全です！」

何に使えばいいんだろうかそんなに、とりノは一瞬暗澹たる気持ちになった。

経済状況の変化で恐ろしい大金を手にしてしまったというのに、更に増やす気なのか。というか既に手遅れである。

（通帳見て気絶しないかなあ……や、通帳は無いか）

変人だが分類的には小市民であるリノは、遠い目でそう思った。

「そうですわ、ご主人様」

「……え、何？」

突然意気消沈した様子で目を伏せたヴィヴィアンを見て、リノは思わず身構えた。

「私……私、ご主人様のご命令もなく外へ出てしまい……今更ながら、申し訳ございませんわ……」

「え、あ、うん……いいけど」

しかし言う事は案外までもである。なんだ、とほっとしたリノだが――

「ですから……ご主人様、お仕置きをっ！ お仕置きをしてくださいませっ！」

その言葉には流石に脱力してカップを取り落としたのであった。



なんとか宥めすかしてヴィヴィアンを諦めさせ、夕方近くに宿に帰った。

ひどく体力を消費した気がする。昨日と同じにベッドに体を投げ出して、ぽい、と靴を床に投げた。

部屋に1人でいると、何もする事が無くなる。

元の世界に居た頃は、日がな一日ゲームに熱中していた。学校から帰ればゲーム、夜中までそうして、朝起きてからも偶に顔を出して、学校に行く。

遅く寝て早く起きるのが生活スタイルだった。そして、それが苦にもならなかった。

金曜の夜からは、殆ど寝ずにゲームに没頭していた。ネットゲ廃人まさにそれなのかもしれない。課金こそ学生ゆえに人より少なかったが、掛けた時間たるや有数のものであると思う。

読書だとか、音楽鑑賞だとか——興味は無いでもなかったが、それはほぼ学校のみで終わってしまうような希薄な興味。図書室で、音楽の時間で。それだけでよかった。

体を動かすのは苦手で嫌い。勉強は、授業さえ聞けばそこそこ出来た。本当に、やる事など何も無いような気がしてくる。

娯楽のないこの部屋で、一体何をすればいいのだろうと、ぼんや

り思う。

「せめて」

その先の言葉は無い。
ゲームを始める前は、何をしていただろう。自分には何があったのだろう。

（探検とか？ ……あー）

よくよく考えてみると、現実から電腦世界に舞台が移っただけで、あまり変わっていない。

（要するに悪ガキだった訳だな）

無茶ばかりして、興味があれば突っ込んで。他人などどうでもよく、自分本位に生きて。

そのストッパーに……なりきれてはいなかったが、一応止める役が幼馴染だった。

リノは暫くぼーとした後、悩む自分がなんとなく恥ずかしく思えて、体を起こした。

「風呂……」

面倒臭そうに服をぼいぼいと脱ぎながら裸足でバスルームに歩いていく。

ドアを開けた時には全裸になっていた。

いくら何でも適当すぎるが、幸いにも見ている者は誰も居なかった。

風呂に入っすっきりし、着替えて髪を乾かす。

生活系魔法のひとつ——熱風を出す《ドライヤー》。何の用途があるんだと思っていたが、案外便利だ。タオルと併用しつつ手早く髪を乾かした。

辺境の魔女が割とホイホイ教えてくれる生活系の魔法。生きていたなら是非とも礼を言いたいものだが、恐らく無理だ。

「はぁ……」

どんなに適当に洗っても艶々と美しい青の髪。ブラシやは持っていないかったので、風呂場にあったものを使っている。

化粧品もそれなりに揃っていて、細やかなサービスの行き届いた本当にいい宿だ。

とはいえリノはあまり化粧品には手を出していない。元々あまり興味が無いので、精々化粧水と乳液を使っただけくらいだ。

この体は、文句無しに美しい。

顔立ちこそ面影があるし体つきはあまり変わらないが、艶々とした肌や髪が嬉しくもあり悲しくもある。自分の生まれ持ったものでもなければ、努力で得たものでもない。

——持っているものだって、自分の体を張って手にいれた訳では無い。

だから、早く会いたい。

唯一対等である幼馴染と。

あるいは、他のプレイヤーと。

「相席してもいいかな？」

「よくない」

「あははは」

食事しに行くと、昨日の男が現れた。返事を無視して向かいに座った男は、相変わらず胡散臭い雰囲気撒き散らして微笑んでいる。

「耳が悪いのかな、君」

「良くないんだろう？ 駄目とは言っていないじゃないか」

「駄目」

「遅いよ」

殴りたい。

パスタをくるくると巻きながらリノは食べるスピードを早める事にした。味わって食べたいが、この男の前に居て平然としていられる訳が無い。

具体的に言うとな手が出そうなので早めに去りたい。

「そうそう。これ、プレゼント」

す、と差し出されたのは白い封筒だった。

封蝋も何も無い、ごく普通の封筒。元の世界にもありそうな有り触れた封筒だ。

しかし、

「……」

右下に小さく書かれた名前を見て、リノは迷わずそれを手に取った。

開いた封筒から素っ気無いような便箋を取り出し、書かれている

文字の筆跡を見て唇の裏側を噛む。

そうしないと、もう笑ってしまいそうだった。

「嬉しそうだね」

「そう？」

リノは封筒に便箋を戻すと、今度はゆっくりと食事を再開した。
これを持って来てくれたのなら、許してやろう。
そんな寛大な気持ちになれるほど愉快だ。

「なるほどねえ。面白い関係だよ」

向かいに座る男がそう言って笑っていても、あまり怒りが湧かない。
い。

リノはグレープフルーツのジュースが喉に染みるのを感じながら、
今更な自己紹介をした。

「僕、リノっていうんだけど。……君は？」

「はは、ありがとう。僕はゼディーギス・ガーズ・レーベルント。
ゼディでいいよ」

「そう。よろしく」

その名前に、周りで食事を取っていた人々が僅かにざわつき、ちらちらとこちらを見た。

有名人か、と思いつつリノは気にせずジュースを最後まで飲み干す。

「レオもだけど、本当に気にしないんだね」

「貴族か何かだろう？ 何でこんな所にいるのか知らないけどね。」

「どうでもいいさ」

「一応、伯爵家の長男だよ。放蕩息子なのさ」
「ふうん」

金茶の髪に、緑の目。それなりに整った高貴そうな顔。……それは兎も角、仕立てのいい服、何よりポケットに無造作に突っ込まれたハンカチに紋章らしきものがある。

見れば分かる、とりノは呆れたように笑った。

「……ごつい名前」

「よく言われるよ」

口説かなくなれば、それなりにゼディーギスはいい話し相手だった。

知識は豊富だし、噂話も良く知っている。放蕩息子は放蕩息子なりにいい所がある。

その日の食事には満足でき、心地よい疲労に身を任せ、リノはぐっすり眠った。

泣き女と遊び人（後書き）

好感度→

見習い騎士と遊び人

理乃へ。

見慣れた字で始まった手紙。いつになく丁寧な筆跡である。

ゼディーギスから何を聞いたのかは知らないけど、いちやついてない。まとりつかれてるだけだから、信じてくれ。いきなり城に居て、やばいと思ったら何故かモンスターが居て、倒したらみこ（漢字が思い出せない）とかいう奴に感謝されて、城を出ようとしたら絡まれてる奴が居て、助けたら感謝されて、城を出たのに何故か付いてきて、あとアイテムの出し方が分からなくて金が出せないから稼ごうとしたら冒険者の女と依頼が被って、一緒に行ったらなんかピンチを救っちゃって絡まれて付いてこられた。

なんかこいつら理乃を探すのを阻止してくる。本気で何考えてるのかわからん。この手紙も奴らから隠れて書いてるから、届くかどうか怪しいけど、ゼディーギスに頼んだから多分大丈夫だ。あいつあれでも伯しゃく（漢字が書けない）家の跡取りだし。

会う場所は多分町になると思う。なんとか振り切って向かうから、できたら明日――

慣れない筆記具を使ったからなのか、所々文字が掠れた手紙を読み終える。

「……とりあえず、漢字の勉強をさせよう」

数えた所、誤字が12箇所あった。

リノはそう誓いつつ、手紙を封筒に戻すのであった。

翌日、身支度を整えて再び町に出た。

今度は商店街を見ていく。食べ物類を買うと店主がやたらオマケしてくれるので、容姿がいいのは得だな、と思いつつ再びヴィックルの居る駐屯所に向かう。

「俺にもくれよ」

「チョコ付いてるから駄目だよ。猫でしょ」

「猫じゃねえし!」

今回は威嚇のためにペット——パンサーナイト豹騎士のバルログを連れてきているので、絡まれる事もない。ちなみに名前だが、豹ⅡヒョーⅡ……という分かる人にしか分からないような微妙なネタである。

豹の頭に屈強な肉体を持つ彼は、プリースト獣人の聖地の番人クルセイドをやっていた。レベルは620で、実は神官に属する神官騎士だ。

見た目はどう頑張っても戦好きの傭兵か何かにしか見えないが。

「つて言うか遠慮が無いよね。ペットのくせに」

「何でだ? 主の食べかけだぞ。狙うだろ、普通」

「うああああ嫌だペットってみんなこうなの!? 変態なの!?!」

「主に対する敬愛が千年掛けて醗酵しただけだ!」

「それは醗酵じゃなくて腐敗だ!」

ちなみに醗酵と腐敗の仕組みは同じで、人にとって有用な場合のみ醗酵と呼ぶ。

「で、そいつは何だ」

「ボディーガード」

「……まあ、良いんだが」

駐屯所にたどり着いたリノは、非常に嫌そうな顔で椅子に座り、脇に跪いた男の顎の下を擦るように撫でていた。本気で嫌そうな顔である。

「あー……何で撫でてるんだ」

「しつこいから」

「ここまでちゃんと護衛したからな。褒美だろ？」

「その気持ちは分からん訳ではないんだが……」

「分かるなああつ！ 大の男が2人して撫でられる事を肯定的に見るなっ！！」

ナメクジを見るような目——いや、リノはナメクジも平気で触れる人種なので、ストレートに言えば変質者を見るような目で2人を交互に見る。

ヴィックルは「解せぬ」とでも言いたげな顔で向かいに座り、バログはむしろ恍惚とした顔になる。リノの表情が更に引き攣った。

「普通の生物が何故ペットになっただけでこんな事になるの？」

「元々普通じゃなかったがな。更正させてくれた恩だろうと思うが」

「まあ、刷り込み的なあれじゃね？ そういえばヒヨコの踊り食いつていいよな、生まれる前に卵ごと食べるやつ」

「ああ……分かる」

「……黙れ人でなしども！」

本来の意味で言えばこの場全員が元々人間ではないが。

そう叫んで頭を抱えるリノを見て、バルログは名残惜しげに床にどっしりと座った。

「で、何の用だ？ 手紙は届いたか」

「届いたよ。今日の午後に合流する予定なんだけど」

「それは良かった」

「……まあ、報告ね。手紙届けてもらったし、これ」

アイテムボックスから出した箱を手渡すと、ヴィックルは意外そうな顔で礼を言った。

「メロンか。ありがとう」

「まあ、お礼にね」

「主からプレゼントか！？ ずるいぞ」

「黙れ。……じゃ、そろそろ行こうかな。午後まで暇を潰さないと」

「いや、待ってくれ」

立ち上がるリノを呼び止め、ヴィックルは少し顎に手を当てて考え込む。

「暇なら、訓練を手伝ってくれないか？」

そして思いついたようにそう言った。



駐屯所の裏手にある訓練用の広場に、どう見ても戦闘用ではないステッキを手にしたリノが立っていた。

上は動き易さを優先した簡素なチュニツクに軽そうなレザーアーマーで、下は革のショートパンツ。白い脚はむき出しで、靴は頑丈そうなショートブーツである。

「来れば？」

「あ、はい……」

向かいに立っているのは、騎士見習いの少年だ。リノと同じくらいの背丈だが、体はがっしりとしている。彼は躊躇いながら木剣を握り締め、駆け出す。

「……」

何故こうなった、とリノは溜息を吐きながらステッキを回した。

数分前、「どうせ暇だからいいよ」と手伝いを了承したのが運の尽き。

（まあ、まさか試合とかさせられる訳じゃないだろうし）

と軽く思っていたのだが、思い切り裏切られた形になる。

狼の顔なので分かり辛いが、おそらくいい笑顔を浮かべたヴィツクルに「頑張れ」と送り出され、バルログには「足ほっせー」ならない感想を言われた。

「対人戦はヤなんだけど……ねえ？」^{PVP}

ステッキを回しただけで剣を弾き飛ばされ、ついでに蹴られて転がされ、背中を踏まれている少年は「へ……？」と気の抜けた声を上げた。

「ほら、次だ次。とつとと出ろ」

「は、はいっ」

訳も分からないまま剣を拾い、少年は頭を下げて戻っていった。

——お世辞にも肉弾戦が得意とは言えないステータスを持つ遊^ブび人だが、数少ない近接武器の1つがこのステッキである。

紳士や老人が持つようなタイプの杖だが、立派な武器である。ちなみにリノが今持っている杖は白い杖で、上の部分が傘の持ち手のようにくると曲がっていた。

「行きますっ」

「おいでー」

リノはステッキをくると回し、次の相手を迎え撃った。

今度は油断もせず、しっかりと構えて飛び込んでくる。リノは地面にステッキを立てるように突いて——

「へっ!？」

——地を蹴ったかと思うとステッキの持ち手を蹴り、そのまま飛び上がって一回転して相手の背後に回る。

「はい残念」

そして背中を思い切り蹴りつけた。

少年は未だ立っていたステッキに鳩尾を直撃されて呻きながら倒れる。観戦していた男達は痛そうにそれを見ていた。

——いや、痛そうに、ではない。

「こんなに強いなんて聞いてねーよ！」

「うわああああうっそだろ……」

「帰ってきてくれ俺の銅貨3枚いいいい！」

賭けに負けて悔しがっていた。

よく見れば一人だけ腕を振り上げて「よっしゃあああもつとやれ！」と叫んでいる。先日リノを出迎えた騎士だった。

貴族らしき者達はやせ我慢して「これくらいはした金だ」と言っているが、それを本気取るような者も居ないらしく、雰囲気は明るかった。

「次！」

ヴィックルの声と共に、呻いていた少年が戻っていき、次の相手が駆けてくる。

腹いせとばかりに派手に飛び回り、貴族平民入り混じった20人程の見習いを全員倒したリノは例の男に「お前いい奴だな！」と何故か感謝された。

これでリノの出番は終わりだ。

「で、俺とあんたが戦うのか」

「……何でこんな事になったんだかな」

そして今、訓練場の中心に立つのは2人の獣人。

周りとりノに乗せられ、ヴィツクルとバルログの試合が始まった。

見習い騎士と遊び人（後書き）

バルログはストリートファイターの意味

補足…ジョブやクラスは人型モンスターには設定してある事が多い。
ただしモンスターだと特有能力で戦うので、あまりスキルは使わない。

観戦する遊び人

ヴィックルとバルログはそれぞれ**剣騎士**バスタードと**神官騎士**クルセイドである。

同じ騎士と付く職ではあるが、**剣騎士**バスタードはやや攻撃寄りの特性を持ち、**神官騎士**クルセイドは回復スキルを扱えるという特徴がある。

「ヴィックル！ 頑張れ！」

「俺は？ 主ー！ 俺は！？」

「そこでボケろ」

「マジで！？」

レベル的には60ほど開きがあるが、双方レベルを200に抑制するアイテムを付けている。大きなスキルはMP不足で使用不能になるが、一応は互角となる。

しかし、防御力が高く攻撃にも長けたヴィックルと、彼に劣る防御力を回復力で補っているバルログ。その上**豹騎士**パンサーナイトは**猫人族**ワッキーに近い種であるため、敏捷に限ってはヴィックルに勝ってはいるものの、やはり攻撃力には欠ける。

（まあ、ヴィックルが優勢かな）

あくまでゲーム知識に従ったの分析だが、リノはそう思った。

試合が始まり、まず動いたのはバルログだった。

正面から真っ直ぐに斬りかかる。ヴィックルはそれを盾で受け、攻撃に転じようと剣を突き出す。――しかしバルログは足を跳ね上げ、突き刺すように迫っていたヴィックルの剣を下から蹴って、もう片方の足で後ろに跳躍した。

「……いや、あれ木剣じゃなきゃ使えない手だよね」

リノが呆れたように言った。

バルログは「何でもありだぜ!」と滅茶苦茶な事を叫び、再び迫って斜めに切り下ろす。

それを再び盾で受け止め、そのまま力任せに押してバルログを跳ね飛ばす。

リノからすれば両方筋肉の塊に見えるが、やはりヴィックルの方が重量がある。

「力つえー!」

そう言ってバルログは嬉しげに唸り、ヴィックルの持った剣より大振りな剣を構えた。

瞬間、木で出来ているはずの剣が陽光を跳ね返したように煌く。

「強化か!」

ヴィックルの声と共に、ガキンと音がした。

木で出来た盾がぱっくりと割れて落ちる。ヴィックルは舌打ちをし、手元に残った片割れを思い切りバルログに投げつける。

こいつらスポーツやらせたらラフプレー連発しそうだ、とりノは

口元を引き攣らせる。

「切れた！？ 投げた！？」

「はんちよおおお！ 騎士道騎士道！」

「……班長って？」

「ヴィックルがこのトップだよ」

「……いや、“班”なんだ。班長なんだ」

「正しくは“小隊”だけどな、通称だ通称。つーか俺ヴィックルの奴め、賭けてやってんだから負けたら承知しな——そこだ殴り倒せええええ！」

叫んだのは先程ぼろ儲けした男である。

一応軍のような組織だというのに賭け事が横行していて良いのだろうか。

リノは心底この国が心配になったが、とりあえず試合に集中する。

振るう度にきらりと輝く剣。見て分かるように、強化スキル——剣の舞？が掛けられていた。？から？まであるのだが、レベル上の問題で今使えるのは？のみである。

クラスに依存しない武器技能である剣の舞は、ごく単純に武器攻撃力を上げるだけのスキルで、？であればその上昇量は武器攻撃力の10%。
ウェポンスキル

10%というのは案外大きいもので、更に強化スキルに彼自身がモンスターとして持つ技能を重ねて使用しているようだ。これは筋力と敏捷をそれぞれ上げている。

「やば、押されてね？」

「うーん。ヴィックルもスキルを使えばいいんだろうけど」

「ああ、班長クラス持ちだもんない。いいよなあ」

「……ていうか、みんな剣ばっか使うから駄目なんだと思うよ」
「そーか？」

クラスが習得できないとはいえ、実はジョブのみの状態でもある
ウェポンスキル
程度武器技能は習得できる。

アナライズ
分析で見ると、男の名はロレンシオ・バラハ。レベルは52
イリイガル
と、以前見た無法者たちよりずっと鍛えられている。

ジョブは遊び人であった。

「……杖とかオススメ」

「杖？ 嬢ちゃんが使ってたような？」

「そうそう。あとカードとかサイコロとかを弄ってるという事があるかもしれない」

「ほー。俺ポーカー強いんだぜ」

「僕も強いよ？」

ちなみに現実でも強い。

「うおおお折れたああああ！？」

視線を戻すと、アクション映画ばりに転がって攻撃を回避するバ
ルログが見えた。

今度は彼の剣が無い。見れば2本に切れた状態で遠くに転がって
いた。

「……どうなったの？」

「班長もスキル使ってー、鏢迫り合いになったらポキッと折れた」

ロレンシオの向こう側に居た見知らぬ騎士がのんびりと言う。
リノは心底呆れたような顔で溜息を吐いた。

「ポキッと……」

「まあ、たまに剣折れるよな。俺のだけ」

「そして給料から天引きされてるよな」

「世知辛い……」

思わず同情の目を向けると、試合の方から大きな音が聞こえる。
見ればバルログが吹っ飛んで壁に激突していた。

「ちなみに今のは両方剣が無くなって取っ組み合いになった結果、
投げ飛ばされたのな」

「……いやいやいやいや」

視線の向こうで、平然とバルログが立ち上がっていた。

そして――

「おい!？」

互いに腰に佩いた本物の剣を抜いていた。

「あーあ」

リノはそう言って、ひとまず2本の瓶を取り出した。――どちら
が怪我をしてもいいように、一応回復の手は用意しておく。

あとは、好きに戦えばいい。万一死んでも蘇生できる。MPの問
題で、そのままなら二度が限度だが。

――人同士の戦い。

それはリノにとって、画面の向こうの話だった。けれど今は違う。
いつ曝されるか分からない以上、慣れておく事が望ましい。

（だからって高みの見物っていうのも趣味悪いけど）

一瞬自嘲するような笑みを浮かべるが、それはすぐに消えた。

試合の結果は、バルログの粘り勝ちであった。

一応かなり時間を潰せたので、リノは1度宿に戻る事にした。
ヴィックルやロレンシオ達に別れを告げ、バルログを連れて宿の方に向かって歩いていく。

「おや」

その途中、何か人ごみが出来ているのを発見した。

やけに女性ばかりのような気がするが、中心部は見えない。

元々欧米系の多いこの世界であるが、背の高い様々な種族との混血によって平均身長は鰻上りに上昇している。千年前なら兎も角、今のこの世界で16歳の160センチはそう高くもないし、むしろ低めだ。

集まっている者達には、20代前後の若い女性が多い。子供はそう多くないので、必然的に人ごみの中をのぞく事は出来なかった。

「主、チビだもんな」

「……よし、突撃しておいで。そのまま帰ってくるな」
「何で!？」

かなり変わったとはいえ、日本人の顔立ちの残るリノは幼く見られるし、背からしても精々13歳くらいといった認識をされる。

必死に伸ばしてこの身長になった彼女としてはかなり不本意だ。

2メートル前後の身長を持つヴィックルやバルログ、更に大柄な某一家には理解できない悩みではあるが。

そう思いつつ通り過ぎようとすると、人ごみが割れた。

——リノ達の方に。

「お？」

「……んん？」

現れたのは、金茶の髪に緑の目をした男である。

「ゼディじゃないか」

片手を挙げて人ごみに「じゃあね」と愛想良く言いつつ近寄ってきたのは、ゼディ・ギス・ガーズ・レーベルント。

リノからすれば胡散臭い笑みを浮かべている彼は、ちらりとバルログに視線を送った。

「外で会うのは初めてだけど、護衛連れ？」

「そんな感じだよ」

「先日は絡まれたと聞いたけど」

「……どこからそんな情報？」

ゼディ・ギスはにこりと微笑んだ。リノもまた、微笑みを返す。

一見和やかな風景だが、背後に竜と虎が見えたと後にバルログは語った。

「これから宿に帰るのかい？」

「まあね。午後から約束があるから」

「そう。ランチでも一緒にどうかと思ったんだけど」

「別に来てもいいよ？ 宿泊客以外は予約がいるらしいからバルログは駄目だけど」

「……えっ」

（というか何で普通に一緒に食べるつもりなの！？）

言った覚えもない。

愕然として膝から崩れるバルログの背中を蹴り、「買い食いはしていいから！」と叱咤しつつ、リノは遠い目をするのであった。

飛び蹴りする遊び人

リノが宿泊している宿、“リンダ・ティンダ”に1人の青年——と、女性たちが訪れた。

ちなみにリンダ・ティンダとは創業者の名前である。それなりの歴史と地味な人気を誇る小奇麗な宿だ。

「えーと、食事の予約取ってたんですけど……」

少し居心地悪そうに、ちらちらと左右と後ろに立つ女性たちを見る。
やる。

文句あるの、といったふうには彼女たちは青年を見返した。

「ご氏名は……」

「あ、レオです」

白髪混じりの初老の男性。この受付に立ち続けて50年ほどになる彼は、実を言うと宿の主人でもある。夜になれば食堂はバーに変わり、そこでバーテンもしている。

人間観察が趣味の彼は、ディルク・ティンダといった。

「少々お待ちください——おや、予約は1名様となっておりますね」

ディルクが予約を確認して問うと、女性たちが青年を睨み付けて服を引っ張る。

おやおや、とディルクは薄く微笑んだまま興味深げな目で彼らを見つつ、“7号室・リノ様より”という手元の文字をなぞった。

「ほらやっぱりっ！」

「レオ様っ、あんなに言いましたのにっ！！」

「あーあーあー聞こえない全然聞こえない……」

もうやだ、と諦めた調子で首を振る。左右から腕を引っ張られ、金髪碧眼の美青年——レオは、溜息を吐いた。

長身で、あまりゴツすぎないが筋肉質の体躯。物語の英雄のように整った顔立ち、僅かに異国の雰囲気を感じさせる。そしてどことなくヘタレ臭が漂うのは気のせいと思いたい。

「待ち合わせのお相手は外出中ですが、どうなさいますか？」

「あー、じゃあここで待って——」

「帰るわよ。まだ間に合うわ」

「いや、何でだよ。何にだよ」

「大体、どうして居るかも分からない幼馴染をお探しになるのですか！」

「噂聞いたからだって——っ！か手紙来たし、今外出中だっただろ！？」

もう泣きたいとばかりに頭を抱える。生まれてこの方——少し幼馴染が離れるだけでこれなのだから、できれば離れたくない。もちろんそれだけの理由で一緒に居る訳ではないが、今はそれが頭を占めていた。防波堤扱いである。

（ちくしょうっ、恋する乙女死滅しろ！）

全国の男女は怒っている。

——そしてその瞬間、レオは背後から強烈な蹴りを喰らってよろめいた。

いわゆる天罰、ではない。

「きゃあっ!？」

「れ、レオ様っ」

心配しつつも蹴りを放った人物を睨み付けて怒鳴る女性たちを、まるっと無視してレオは恐る恐る振り向く。

綺麗に着地して歩み寄り、その人物はレオの胸元を引っ掴んで引き寄せる。

そして——

「レオのくせに何様だっ、ディカプリオに謝れ！」

物凄く理不尽な台詞と共に、小気味良い音を立てて音速のビンタが入った。

小柄な少女——リノは、ちょっと嬉しげだが怒っている、という奇妙な表情でレオを睨み付けている。レオは呆然としていたが、すぐに笑顔を浮かべた。

「リノ、会いたかったっ」

ぶんぶんと振られる尻尾が見えるかのような懐っこい笑みである。向けられた事のない満面の笑みを見て、周囲の女性が射殺さんばかりにリノを睨み付けた。

リノは溜息を吐き、言い聞かせるように言う。

「だからそれが誤解を招くって言っているだろう」

「だってもう俺本当に胃が千切れそう……」

「そのまま千切れればいいっ、あと触るな！」

泣き言を言いつつ無意識に伸びた腕を払い、鳩尾に拳を叩き込む。
まるで流れ作業のような滑らかな動きであった。

「そうだぞっ、主に触るな変態っ！」

「お前が言うなあっ」

そして背後からにじり寄った豹騎士^{パンサーナイト}を蹴り付ける。――思い切り
急所を蹴られて悶絶した彼を見て、思わず後ろから眺めていたゼデ
イーギスが呻いた。

「ちょっと、どういうつもり！？」

「何が？」

「いきなり蹴り入れるなんてっ、何考えてんのよ！ レオはあんた
を探してたのにつ」

自分たちで妨害していた事は完璧に棚に上げ、冒険者風の女性は
怒り心頭で詰め寄ろうとする。リノは平然と、むしろ自分から詰め
寄ってじろりと下から上目遣いに睨む。

得体の知れない迫力に下がろうとすると、腕をぐっと掴まれた。

「蹴り入れたのが、酷いって？ 16歳に纏わりついて、見知らぬ
土地で唯一の知り合いに会おうとしてるガキを妨害する方がよっぽ
どアレだよね」

「なっ」

「酷いなー、心細かったー超寂しかったー」

とてつもない棒読みで言いながらレオに抱きつく。抱き付かれるのは嫌がっても、逆は良いらしい。

「俺も寂しっ」「というか、大人のくせに名乗りもしないで初っ端から怒鳴りつけてくるとか、どうかと思うよね！」

3人の女性はぐっと口を噤んだ。貴族でも、冒険者でも、神職でも、全くの他人に怒鳴りつけるのは望ましくない。ましてや、名乗りもしない他人がレオとリノの事情に口出しするのも可笑しい。

言葉を遮られたレオは、飼い主に怒られた大型犬のようにしゅんとしている。

「……ジーナ・カロッタよ。冒険者」

冒険者風の、ショートカットの茶髪の女性が言った。目はオレンジ色で、いかにも姉御肌な雰囲気である。

ジーナ・カロッタと言えば、凄腕の女性冒険者として大陸全土に知れ渡る有名人である。平民出の彼女だが、魔法剣士ルインブレイドのクラス持ちでもある。

「ジュベレ公爵家長女、アデライド・シュアリナ・ジュベレですわ」

腰まで伸びたピンクの髪に同色の瞳。ジュベレという苗字には僅かに覚えがあるので、かなり古い家系だろう、とリノは思った。

ジュベレ家の開祖と言われるラジェイト・ジュベレがリノの知るジュベレの者だ。1000年前に生きた彼は別に貴族ではなく、冒険者だった。唐突にプレイヤーがいなくなった世界で冒険者の需要は鰻上りに上昇し、どさくさ紛れに国に召抱えられて爵位も貰い、今に至る。

その血筋のお陰か、ジュベレには良くクラス持ちが生まれる。この国では王家に次いで力がある家とも言えた。

「レマリー・セラータ・レイスティアです」

艶やかな黒髪に、黒い目、巫女服。職業が大変分かり易い容姿をしていた。

レイスティアとは神に仕える者が名乗る姓だ。神殿に正式に所属する者は例外なくこの姓を名乗り、元の身分を捨てる……事になっている。何事にも例外はあり、そして貴族は例外を通し易いものだ。更にセラータとは神と対話できる唯一の立場、巫女だけに与えられる名前だ。名誉ある名前を、あまり無い胸を張って自慢げに言う。

「ふうん」

と、有名人3人の自己紹介を聞いて洩らした感想は以上であった。リノからすれば全部どうでもいい。知らないものは知らない。「じゃ、行こ」とレオの手を掴んで食堂に入っていく、それをゼディーギスとバルログが追った。

「へ？」

「えっ」

「は？」

彼女たちにとって、名を名乗ってこれほど無反応だった事は初めてだった。

肩透かしを喰らい、しばし呆然とした後に追いかけてようとして――それをディルクが制した。

「お待ちくださいませ。大変申し訳ございませんが、当宿屋ではご

宿泊のお客様以外の食堂の利用はご予約が必要になっております」

そしてその言葉に、ますます3人は哑然とした。特にアデライドとレマリーは、まさか自分を止める人間など居ると思っていなかった。昔より権力が弱いとはいえ、一応公爵家の娘と巫女なのである。

「そして予約は現在1週間待ちとなっております」

更に言うところの宿は繁盛していた。ちょっと背伸びすれば貴族並の美味しい食事が取れるので、食堂はいつでも大繁盛なのである。

「またのお越しをお待ちしております」

笑顔で言いながら、暗に「お引き取りください」と目で言う。――そもそも利用層に入らない貴族や神職の2人に媚を売っても仕方がない。ゼディーギスは数少ない例外だ。更に冒険者は大抵行き着きの宿があるので除外する。

部屋の種類を問わず代金は1人いくらで決まるし、身分は関係ない。別段貴族の客が来なくてもやっていけるのである。今の時代、貴族と平民の差など殆ど無く、平民相手と同じ態度を取ったとて罰せられはしない。そもそも普段顔を合わせないのだ。

だから、利用してくれる見込みのない者よりは、現行で利用している者を優先する。

10日滞在3食付のリノや、一部屋を年中借り切っているゼディーギスという上客の機嫌を害するなら、貴族も巫女も追いつ返すのがデイルク・ティンダという男である。

（面白いお客様ですねえ。これは見守らなければ）

それに、もう1人宿泊客が増えそうな気がする。
ディルクはレオがこのまま宿泊してくれる事を期待しつつ、残り
2人を叱咤して出ていくジーナの背中を見送った。

「あんたたち、今日の所は帰るわよっ、不本意だけど！」

「なっ、何であなたが仕切ってるんですのっ!？」

「そうです、偉そうにっ」

「うるさいっ！ 普段回りに何もかもやらせてる小娘どもが偉ぶる
なっ！ 言っとくけど、権力で平民の予約に割り込むつもりなら、
あたしは殴ってでも家に叩き返すわよ。そもそもあたしの護衛があ
って外出許可出されてんでしょっ」

「う……」

やはり姉御肌だ。

そう思いつつ、ディルクは万年筆をくるくると回して満足げに微
笑む。

今月も、どうやら黒字だ。

ランチタイムと遊び人

円形のテーブルに3人で座る。

ごく自然にリノの脇、の床に座ったバルログについては誰も突っ込まない。

「えーと、リノ……」

「何？」

レオはちらりとテーブルから突き出た頭を見た。

突っ込んだら負けの仁義無き戦いが繰り広げられ、瀟洒なテーブルの上に鋭いような微妙な空気が漂っている。

「何かその、気になる事は……」

「無いけど。……ゼディは？」

「僕は無いなあ」

三人は胡散臭い、またはぎこちない笑みを向け合った。

その時丁度、料理が運ばれてくる。本日のメニューは魚介類がメインらしい。

（こんなところで、どうやって魚獲るんだろ）

レイステイルのメインの舞台となる大陸は、レイス・デアという。

ジャガイモのような形で中央に大河があり、王都は丁度川と海の中間あたりに位置する。

水を得ることは難しくはないが、魚はどうするのだろうか。浮かんだ疑問を知ってか知らずか、給仕の青年がにこやかに説明した。

「本日は空魚ソラウオや空貝ソラガイをメインにしたメニューになっております」

レオが首を傾げる。しかしリノは納得したように微笑み、なるほど、と呟いた。

空魚や空貝は、水中ではなく空中で生きる魚介類モンスターである。

空魚は地上3〜5メートルを泳いでおり、餌を付けた細い棒を突き上げて釣る。空貝は屋根や崖にくっ付ていることが多い。

深海魚とは逆に高空魚というものがいて、遙か空の上に生息していたりもする。

ちなみに未確認生物のスカイフィッシュとは違う。

「あ、あれか！ フライングカジキマグロ事件」

「……まだ言う？ それ」

フライングカジキマグロ事件は、空魚や空貝が実装された時に起きた事件である。

当時、空釣り用の竿だけ実装が遅れており、闇雲に空に向かって攻撃した命知らずが居た。

リノである。

攻撃されたカジキマグロは落下し、通りすがりのプレイヤーの脳天に見事突き刺さった。

しかもそのプレイヤーがイロハ・ニホヘトだ。当時既に魔術師^{マジシャン}にあるまじきHPの高さを誇っていたため、そのまま平然と動いていた。

脳天にカジキマグロを突き刺したままりノを追いかけるイロハ。爆笑しながら攻撃され、死の恐怖を味わった。

追いかけてこはレオを巻き込み、当時まだ【アルテマ】は未結成であったものの、現メンバーの一部まで巻き込んだ。その結果、イロハ対数人の至高人^{ハイランダー}のバトルは前者の勝利に終わった。恐ろしいことに。

「ほんとトラウマなんだけど」

「あれがきっかけだよな。対師匠同盟組もうぜって」

「そうそう。わざわざ至高人^{ハイランダー}集めてね」

阿呆らしいことに、それが【アルテマ】結成の理由だ。他にも、「全員違うジョブの八人組ってなんとなくかっこいい」といった感じの理由もある。何天王だとか何騎だとか何勇士だとか、そういったものに憧れていたのだろう。

だから、ほぼ全員がギルドに属していなかった八人はあっさり纏まったのだ。

「結局8人でも負けたけど。ありえない」

「マジでありえないよな」

「……レオみたいな人が8人で勝てないって、想像付かないね」

何をやらかしたんだ、とりノが軽くレオを睨みつける。

彼女もあまり人の事を言えないのだが。

昼食だからか、食事はやや軽めのメニューだった。

空で泳ぐ魚だといっても、味は海のものとはそう変わらない。サンドウィッチに挟まったスモークサーモンやツナ、クラムチャウダーに入っているアサリ。

リノは魚介類に好き嫌いはないので、喜んで食べている。

「リノ……」

「アサリね」

「うん」

むしろ食べられないのはレオの方であった。

魚はいいが、アサリが苦手なのである。シジミやハマグリは喜ぶというのに、何故かアサリだけは食べられない。アレルギーではないが、兎に角嫌なのだ。

レオは申し訳無さそうな顔でアサリをリノの皿に移していった。1つとして見逃すことなく。

「……つく……!」

横でゼディーギスが笑いを堪えている。

「なんだよ」

「ゼディ、レオはアサリとホワイトチョコと黄色いパプリカだけは死んでも食べたくなくて、シジミと普通のチョコと赤いパプリカは平気なんだ」

「意味っ、が、わからな……い!」

「お前もう笑ってんだろ! なあ!?!」

いよいよ堪えきれずに笑い声を洩らすゼディに恨みがましい目を向けつつ、アサリを移していく。大分アサリが増量されたスープを、リノは文句も言わずに飲む。

「僕は酢豚のパイナップルだけは無理。あとキムチが嫌いだなあ。キムチごはんは良し」

「ごめん、ほんと、君たちって……！」

ツボに入ったらしく、その先に言葉は続かなかった。

「それにしても、ゼディが居るとあんまり下手な事言えないね」

「何で？」

「胡散臭い。超胡散臭い。何か密偵臭い」

「やだなあ、照れるよ」

「褒めてねーだろ」

かなり綱渡りなやり取りが頻発したが、一応和やかにランチタイムは終了した。

ゼディーギス是用事があるから、と去っていく。にこやかに手を振る男を見送って、リノとレオは同時に溜息を吐いた。

「疲れるな、あいつといると」

「だよね……」

顔を見合わせて、どちらからともなく口元を緩める。とにもかくにも、再会できて安心できたようであった。

ディルクに「2人部屋も空いておりますが」と満面の笑みで言われたりしつつ部屋を取り（もちろん1人部屋である）、ひとまずレ

オの部屋に集まる。

ちなみにバルログはアイテムボックスから出した骨付き肉を与えて送還した。

「――で、どこまで分かってる？」

ベッドにごろんと転がって、視線だけレオに向けて言う。

男の部屋であまりに無防備すぎるが、2人にとっては日常の範疇なので今更である。

「ここがアーティアレストだとは分かってる」

「それだけ？」

「そんだけ」

「……よくその状態で普通にされてられるよね」

呆れたような声に、レオはウィンドウを弄りながらあっけらかんと返した。

「リノが知ってると思って」

「……」

居るかも分からないのに頼るな、と突っ込もうとしたものの人の事を言えないので口を噤む。

代わりに、深い溜息を吐く。

「じゃあ、知ってる事話すけど――」

そして、現状の説明を始めるのであった。

◆
――夕方、ゼディーギスはほとんど自室のようになって宿の一室で、くるくると万年筆を回しながら書き終えた報告書を読み返していた。

「付け入る隙も無いほど仲良しだからなあ。困った困った」

風呂から上がったばかりらしく、金茶色の髪はまだ湿っている。ランプに照らされて浮かぶ容貌は、昼間よりも遥かに整って見えた。

それもそのはず、昼間の彼は魅力をかなり下げている。ステータス的な意味で。

でなければ彼の役職として致命的な程に目立つからだった。

「……これ外したら、結構いけるんじゃない？」

王家に伝わるアイテム、醜姫の指輪。

……ちなみに、ただのマイナス補正の付いたゴールドリングである。リノたちならNPCに投売りする程度の品だが、現代では王家伝来の秘宝扱いである。

その効果は、魅力ステータス－30%だ。普通の人間なら元々の値が小さいからそう変化することもないが、ゼディーギスの場合は雰囲気どころか顔までがらりと変わる。

それでもちやほやされるのだから、元の容姿が優れているのだろう。

髪的水分を拭うのもそこそこに、紙を小さく折りたたんでいく。そして窓枠を軽く叩くと、小鳥が1匹どこからか現れる。

「父上に。――ああ、勿論本物の方にね」

『カシコマリマシタ』

体は白く、頭は緑色の小鳥。これもまた王家に伝わるもので、《
メーラーバード
伝書鳥》と言う。見た目こそはリアルな小鳥だが、魔力で動く細工
品だ。

暗くなり始めた空に羽ばたいていく小鳥を見送ってから、ぼすんとベッドに沈む。

一体明日はどんな面白い事をやらかしてくれるのだろうか。

ここ最近の報告書が観察日記と化してきた事は否定できない。ゼ
ディーギスは思い出し笑いをしながら、ランプを消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1876w/>

レイスタイルの遊び人

2012年1月7日01時20分発行